

<b>Title</b>	「食卓の絵」を通してみる現代の子どもの家族関係：心理主義化された家族関係を越えて
<b>Author</b>	中井, 孝章
<b>Citation</b>	生活科学研究誌. 5 巻, p.189-211.
<b>Issue Date</b>	2007-03
<b>ISSN</b>	1348-6926
<b>Type</b>	Departmental Bulletin Paper
<b>Textversion</b>	Publisher
<b>Publisher</b>	『生活科学研究誌』編集委員会

## 「食卓の絵」を通してみる現代の子どもの家族関係 ——心理主義化された家族関係を越えて——

中井 孝章

大阪市立大学大学院生活科学研究科

Family relation of children of the present age seen through their “picture of a dining table”  
— Beyond psychologism of family relation —

Takaaki NAKAI

*Osaka City University Graduate School of Human Life Science & Faculty of Human Life Science*

### Summary

This paper grapples with the eating habits, the dining space, eating form of the present children by means of the eating habits research of children based on Adachi's meal ecology investigation and children's “picture of a dining table” based on Murota's method of the Kinetic Family Drawings (KFD) as a drawing technique.

Though it is based on the above-mentioned precedence research, the originality of this paper does not emphasize the character-formation function of a dining table, but evaluates it relatively through a history of a modern family. That is, generally, while a dining table is a place where a family including parents baste or educate a child and an opportunity for a child to develop communication skills or to acquire mental stability through a family pleasure of home life. It is only the position of the so-called psychologism of a dining table. The author asks another thing for the important function of a dining table while criticizing the psychologism of such a table. For a paradoxical way of speaking, the reason is as follows: namely, be not that children have an opportunity of a meal with a family including parents together, but that children who eat a solitary meal (Ko-shoku) have a very poor menu compared with children who eat a meal with a family (Kyou-shoku). Truthly, in eating a solitary meal (Ko-shoku) the balance of three vessels, indispensable to a rapidly growing child, is evaluated as bad, and the child of Ko-shoku cannot take sufficient nutrition. Therefore, Ko-shoku is not a mental problem of a child but a physically unhealthy problem for a child.

As mentioned above, this paper advocates an objection to “psychologism of a dining table” which asks for the function of family relation formation, characterformation, and the mental development (growth) from a standpoint of meal ecology investigation. Further, the author investigates the state of family relationship of the present children by analyzing children's “picture of a dining table” which they draw through KFD as a drawing technique. Consequently, since the present children's experience which may be talking with a family or exchanging a smile at the dining table is decreasing, children can not draw a family's expression and presence in a picture and express those as mere signs (mark of a person by the circle, a square, and the line, etc.).

From the above, although domestic psychologism of a dining theory and a family theory must be avoided, it is indispensable for children to have an opportunity of ordinary communication or talk with a

family through a dining table. However an opportunity to communicate with a family does not need to be limited to a dining table, i.e. a family pleasure of home life.

**Keywords:** 食卓 *A dining table*  
 心理主義 *Psychologism*  
 孤食 *Eating a solitary meal (Ko-shoku)*  
 食生態学調査 *Meal ecology investigation*  
 動的家族画法 *A method of the Kinetic Family Drawings*

## はじめに

2005(平成17)年6月,食育基本法が制定された。食育基本法とは,食育を「生きる上での基本であって,知育,徳育及び体育の基礎となるべきもの」と位置づけ,「様々な経験を通じて『食』に関する知識と『食』を選択する力を習得し,健全な食生活を実践することができる人間を育てる」ことを,「家庭,学校,保育所,地域等を中心に,国民運動として」推進しようというものである(法案前文)。そして,食育を推進するために内閣府に「食育推進会議」が設置され,「食育推進基本計画」が作成されるとともに,都道府県,市町村単位でも「食育推進会議」が設置され,地域ごとにその地の個性を生かした「食育推進計画」が作成されることになる。

食育基本法が成立する以前でも,戦後の栄養改善運動,栄養不足から過剰に転じてからの減塩や「一日30食品」の勧め,さらには日本型食生活にもとづく「食生活指針」など,食生活にかかわる運動は,連綿と継続されてきたが,いずれも一定の科学的,栄養学的基準のもとに国民を啓蒙する運動に過ぎなかった。これに対して,今回の食育基本法は一線を画している。すなわちそれは,「地域の多様性と豊かな味覚や文化の香りあふれる日本の『食』が失われる」(法案前文)という危機感を表明し,“地域に根ざした食”という視点を強く打ち出しているのである。そのため,食基本法のもと,食育が目指すものは,「健全な食生活の実現」だけでなく,「都市と農山漁村の共生・対流」や「消費者と生産者との信頼関係の構築」,「地域社会の活性化」,「豊かな食文化の継承及び発展」,「環境と調和のとれた食料の生産及び消費の推進」,「食料自給率の向上」と幅広い。つまり,食育基本法は地域の「食・農・暮らし」を一体のものとして,国ではなく地域の側から食を捉えようとしている。その見方は,農業を産業の一部門としてではなく,「暮らしをつくる産業」として見直し,地域活性化や食料自給率の向上も経済の原理からではなく,暮らしの原理から捉えることにつながる。以上が食育基本法の新しさである。

食育基本法によって次のことが具体的に展開されると

考えられる。すなわち,1)学校や保育所,児童関連施設等の食育推進,2)家庭における食育推進,3)地域における食育推進,4)食育推進運動,5)生産者,消費者との交流の推進,6)食文化継承のための活動,7)食品の安全性,栄養その他の食生活に関する調査,研究,情報の提供,国際交流の推進,である。

今後,食育基本法によってすべての学校や家庭などで食生活の改善が促進されることになる。とりわけ,幼児期からの生活習慣病の予防は緊急の課題であり,家庭と学校では望ましい食生活と食習慣を育む食育の必要性が高まっている。特に,生涯を通じて健康に過ごすための食生活,長寿に向けての食生活について理解を深めていくことは,家庭と学校が担う重要な役割である。

学校給食が果たすべき役割や課題については別の論稿や著書のなかですでに論述しているので,本論文は,子どもの健康,安全,長寿に向けて家庭が果たすべき役割と課題,特に現在の家庭での食生活状況を踏まえつつ,著者自身が実施した調査結果を手がかりに述べていくことにしたい。

## I. 食卓の家族論

### 1. 子どもの食生活問題

——子どもの食欲の低下と食事の団樂の欠如——

2003年～2004年度大阪市の子どもの生活実態調査によると,現代の子どもたちは食欲に乏しく,小学生でも,朝食時に食欲がある,食事が待ち遠しいという声は,14.9%程度しか聞かれない。夕食でさえ,60.2%である。空腹感を実感することが少ないことを問題とみる必要があるのか,速断はできないかも知れない。単に,食物が豊富にあることの結果にすぎず,欲求が満たされているのだから,好ましい食の状態とみることができる。しかしながら,次の3つの理由から,食欲に乏しいことは子どもの食の状態として,大きな問題をはらんでいると考えられる。

第1に,食欲に乏しいことは,子どもの食の様々な問

題が濃縮して表れた結果だとみることができる。つまり、子どもの食欲がないということは、食べている食物の栄養素上の問題、食物の固さや嵩など物性上の問題、食事リズムの問題、およびそれらの複合として生じる健康上の問題、食の団欒や食文化上の問題、調理技術や食事づくり技術上の問題、食嗜好の問題、食事観の問題等々のすべての結果なのである。

第2に、食欲は食の根源にかかわる問題と思われるからである。食欲は、元来、生き物が生きる上での基本的欲求であり、食行動の内的動因である。それが乏しいということは、単に満腹の状態が続いているとみるよりも、生きる欲求を欲求として知覚し、表出し、そしてそれを満たすという、欲求そのものの再生産のプロセスがうまく行なわれていない状態ということができる。

第3に、食の主体的な変革の能力にかかわることと思われるからである。具体的には、脂肪摂取過剰、ミネラル不足、それらの栄養素間のインバランス、食事リズムの乱れ、食の場面の心理的葛藤等々は、食欲の低下と深くつながっている。

さて、以上のように、現代の子どもの食欲が低下しているという現実があり、それは子どもの食生活問題としてのつぎきならない事柄だということは確かである。この類の問題は、主に、栄養学や食生活学が緊急に取り組むべき事柄である。

子どもの食生活問題としてこうした問題があるその一方で、食事の団欒の欠如もまた、大きな問題点として指摘されることが少なくない。つまりそれは、食事にかかわる家族関係の問題である。この類の問題については、主に、心理学、教育学、家族社会学が取り組むべき事柄だといえる。それにしてもいま、なぜ食事の団欒が取り沙汰されるのであろうか。

一般に、人間の親密さを形成する上で食事をともにすることは大きな効果をもち、特に家族関係の形成において、家庭内での家族との共食のあり方が大きく影響するといわれている。家族の「団欒」の場面として圧倒的に多くの人が思い浮かべるのが「夕食」の場面である。家族が集まってともに何かをする場として、日常生活のなかで行なわれるのは、食事かテレビ視聴ぐらいしかない。団欒の場として食事は数少ない機会となっているのである。その意味で、食事は家族にとって求心的な契機となるのである。

それではいま、食事の団欒を検討してみる意味はあるのだろうか。あるとすれば、それはどのようなことなのか。子どもが、食事を誰と食べるかが、食事の楽しさやコミュニケーションのみならず、食事内容や健康状態に

もつながりをもつことは見逃せないことだろう。前述したような食欲の現状であればこそ、食事の団欒をもう一度見つめる意味があると思われる。家族のかかわりの全体のなかで、食事の場面でのかかわりがどれほどの役割を果たし、他の場面とは異なる意義があるのだろうか。逆に、食事の立場からは、食事の機能全体のなかで、家族のかかわりはどれほど大きい意味をもつのであろうか。現代における食事の団欒がどのように行われ、どのような内容をもっているのかを把握することによって、食事の団欒を守る意味と食事の場面では果たし得ないこととの判別ができてくるものと考えられる。

同時に、子どもの食欲が乏しいことも、単に栄養素過剰摂取に起因するのみならず、食事の機能全体のひずみから生じると考えた方が妥当ともいえる。団欒が食事のもつ機能の大きな1つと考えられることから、食事の団欒が、子どもたちの食べる力の形成にどのようにかかわり得るのか考えていくことにしたい。

本論文では、食事の団欒を、とりあえず「家族が集うこと」とシンプルに捉え、家族が全員一緒の食事、大人の誰かと一緒の食事、子どもたちのみの食事、子ども一人だけの食事が、一体、食事としてどのようなになっているか、さらに子ども自身にどのような影響を与えているのかについて、さまざまな側面を通してその全貌を描いていくことにする。そして、こうした文献に基づく先行研究を踏まえた上で、2004年大阪市で実施した、子どもの描く「食卓の絵」の分析を手がかりとしながら、家族との食卓を介した子ども（被験者）たちの家族とのかかわりや家族観について分析していくことにしたい。

## 2. 食事の団欒の現実と幻想

### 1) 「一家団欒の楽しい共食」という家族言説

#### —その成立の社会的背景—

以上述べたように、家庭での食事は、他の家庭機能の外在化と比べて相対的に外在化されず、家族団欒の“最後の砦”として家庭内機能にとどまっている。実質的にはデパ地下やスーパーで購入した中食（できあいのお総菜や炊き込みごはんなど）を家庭で食べる場合が少なくないにせよ——できあいのグルメ料理をテイクアウトし、自宅で食べることを特に「都市機能の家庭内部化<sup>2)</sup>」と呼ぶ——、一応、肉食は営まれている。本論文では、そうした肉食を家族と一緒に食べることを含めて食事の団欒に包括することにしたい。

ところで、そもそも食事は「団欒」の場として捉えるものなのだろうか。この一見あたり前のことから根本的

に検討してみる。

『広辞苑』によれば、「団欒」とは、①月などのまるいこと、②集まって車座に座を占めること、③集まってなごやかに楽しむこと、親密で楽しい会合とある。日本人の日常の食事の場面は、元来、家族が集まっていた場なのだろうか。楽しく親密に行ったものなのだろうか。むしろ、子どもにとって長幼の序や作法が厳しく、ピクピクしながら食べ、家長が不在のとき、安心して楽しい食事をしていたかも知れないし、嫁は口に合わないものでもがまんして食べていたかも知れない。大家族の主婦などは、給仕に追われ、自分の食事はろくにかまわずに流し込んでいたかも知れない。商家では家業との関係で、家族揃う食事の方が珍しかったかも知れない。同一家計のなかで、同じ釜の飯を食べているというつながりは現実にあるにしても、いわゆる「団欒」の場ばかりではなかったのではないかと推測できる。食の団欒自体がいずれかの時期と比較して減少しているという事実があるのかどうか、正確なところはわからない。現在と比べて、以前はもっと多かったといえるかどうか定かではない。

特に、戦前の家庭は、農村は勿論のこと、都市でも三世同居の大家族が多く、少なくとも朝食と夕食は、家族全員がおおむね揃って食卓を囲んだといわれている。父親が夕食の食卓につかないのは、1週間の内せいぜい2回程度であったことから、父親を中心に三世代の家族が正座し、黙々として食べ、食前・食後の挨拶を交わしたという。おしゃべりは食事マナーに反するとされていたが、父親の説教と小言だけは例外であった。

山路健によると<sup>3)</sup>、悪童(悪ガキ)だった子ども時代の自分からすると、いつも父親から小言をいわれるのは決まって食卓の場であり、食事時は「苦」の時間帯だったという。だから、小言を聞くのがいやで、そそくさと食事をすませて、大急ぎで食卓を離れたものだという。子どもの彼にとって父親不在の食卓ほど楽しいものはなかった。子どもだけが夕食の共食をいやがったわけではない。家計をめぐる夫婦の言い争い、姑と嫁の味つけをめぐる嫌みや確執等々、一家揃っての夕食の食卓は、母親や祖母のつくった手づくり料理ではあったが、楽しいどころか、家庭裁判所の縮小版であった。そうした事情は、三世代家族で暮らす家庭ならば、いまの家族でも大差はないと思われる。

「一家団欒の愉しい共食」——一体、誰がそのようなのであろうか。それは恐らく、戦前派のひとつまみの有産階層の少数派と戦後派世代であらう。ところが、これはまったくの嘘に過ぎず、一家団欒の食事は、現在こそ多く見受けられるのである。

1980年代日本が消費社会に入ってから——特に、現在は——、ウィークデーの食事は、家族全員の忙しさから「食事の外部化」に依存する機会が増える一方である。そのため、孤食、個食、多回食と食事形態が多様化している。その反面、日曜日あるいは休日の内食は、たとえば調理済み素材や食品が「資本の味」のものであったにせよ、レディメイド的な手づくり料理が作られたり、あるいは主菜が手づくり、副菜が各々の好みに合った高級な惣菜やデリカが供卓されたりする。

一方、「外食の家族化」が多くなっていることは、最近の統計データ(2003年の総務省統計センターの家系調査<sup>4)</sup>)によっても明らかなることであり、外食にかかる費用が1家庭あたり、12,276円(食費、平均66,729円)となっている。これは食費全体の約18.4%に相当する。また、家族揃っての外食が画一化・均質化したメニューの共食であるにせよ、一家団欒の外食には違いない。ファミリーレストランの座席で親子の言い争いや葛藤をみかけることはほとんどないことからすると、子ども(特に、親から叱られることの多い子ども)にとっては、内食での共食よりも、外食の家族化の方が楽しく、安心であるといえるかも知れない。

以上述べたことを極論するならば、過去はつねに美化されるといえる。つまり、過去において一家団欒があったというのは、戦後派世代の“ないものねだり的な”願望から生じた幻想に過ぎない。食事での一家団欒は、子どもや家族にとって良い面ばかりではないどころか、むしろ負の側面を合わせもつのである。

それではなぜ、近年、食事の団欒が少ないとして問題視されるようになってきたのであろうか。その主な要因として考えられるのは、家庭の団欒への期待が増加してきたことおよび食の機能に団欒をより重視する傾向が社会にあるということである。その社会的背景には、プライベート化(私化現象)のより一層の進展や親密圏の濃密化がある。裏返せば、そのことは、食の団欒をより求めなければならないほど、他の団欒の機会がなくなりつつあるということの意味する。戦後日本の家庭を概観すると、バス(風呂)や子育て等々、家庭のもつ諸機能の多くが外在化していったといえる。そのなかで食もまた、そうした家庭機能の外在化の波を受けながらも、他の諸機能と比べて、まだ家庭で行われることが少なくない(とはいえ、外食産業だけでなく、中食産業の隆盛もあって最近では食機能もまた、実質的には外在化されつつあるのは事実である)。こうした家庭機能の外在化の代償として、食、特に家族との食事の団欒が求められているのである。つまり、家庭機能の外在化と反比

例して、中食化も含めて食は内食化されつつある。

以上、家庭（一家）の団欒への期待の原因は、食以外の家庭の諸機能の外在化の代償であることが明らかになった。一言でいうと、食以外に、家庭および家族が求心的契機を持ち得なくなったわけである。また、そのサブ要因としては、次のような社会的背景が考えられる。(1)父親の権威が喪失したこと、(2)母親が経済力を身につけて発言力が強くなったこと、(3)母親と同様、子どもも自己主張できるようになったこと、(4)核家族化したこと、(5)これは一部に該当することであるが、三世帯世帯でも、主婦の有職化・社会進出によって姑が食づくりを分担するケースが多くなったこと等々が挙げられる。

たとえ“手抜き”の一家団欒の内食であるにせよ、また、均質的なファミリーレストランの外出にせよ、現在においてこそ、共食の回数は以前よりもずっと少なくなっている。従って、「一家団欒の復権」というのは幻想であり、ファミリーレストランなどの外食産業における「チャブ台の社会化」によって一家団欒が再編され、普遍化していると考えられる。

## 2) 共食単位としての家族

### —共食の動物学的意味—

以上、「一家団欒の楽しい共食」という家庭言説の批判的検討を通して一家団欒の現実と幻想を区分けしてきたが、次に、共食についてヒト（動物）としての人間の側面から—アンチ・ヒューマニズム的に—みていくことにする。

石毛直道は、家族と食事の関係について、「そもそも家族というものの自体が食の分配をめぐることで成立したものであり、すべての民族における基本的な共食単位は家族である。<sup>31)</sup>」と述べている。すべての民族とはいわないまでも、たいいていの民族では毎日一緒に食事をするメンバーが「家族」として実感されてきたに違いない。

ところで、動物は個体生活者としての能力があり、孤独でも生きられるが、群をつくる動物の社会のなかで、かなり高等なものになると、個体では生きられないような条件（食事やセックス）が出てくる。セックスのことはさておき、食事の場合だけをみると、高等動物のサルも一匹一匹が各々勝手に食べている。仲間のサルと一緒に食べると、せっかく自分でみつめてきた食べものを奪われてしまいかねないからである。そうすると、共食は人間に固有の食事様式であることになる。なぜ人間が共食するようになったのか。それは、石毛がいみじくも述

べるように、家族を形成するためであり、共食単位が家族単位になったからである。

共食が成立する条件は、一定の収穫物の確保と、その公平な分配とにある。稀少性のもと、限りある食物の分配にトラブルが生ずるようでは共食は成り立たない。だからこそ、公平な食物の分配をないがしろにする行為をなくすためにつくられたのが食事の掟であり、作法であり、コミュニケーションなのである。

日本では豊穡を神々に感謝し、収穫を祝うときに神々に捧げる供物から、神人共食（なおりい）という儀式が共食の原点となった。古代では神への交わりをタテに、家長を頂点とする家族員をヨコの関係にした共食が形成された。また、石毛は「同じ釜の飯を食った仲という言葉で表現されるように、人間の集団は食をともにすることによって連帯を深め、集団が強化される。食事はコミュニケーションの手段でもあるのだ。……（中略）……食事をわかちあうことは、こころをわかちあうことである<sup>32)</sup>」と述べ、食の原点はともに食べることでであると結論づけているが、これは前述した箇所と比べると、あまりにも人間中心主義的な解釈に過ぎないのではなからうか。

ところが、今日の共食をみると、神に代わったのがテレビである。テレビを観ながら、家族全員が黙々と口を動かしている共食の風景は、集団飼育のプロイラーがガツガツとエサを食べている様相とそっくりである。

以上のように、家族が揃って楽しく食事をするというのはタテマエであり、食物の公平な分配がそのホンネなのである。いまや、日本人の共食は、黙々とエサを食べ続けるプロイラーの集団給餌と同じに過ぎない。

## 3. 食卓の人間形成機能の批判的検討

### —臨床心理学からのアプローチ—

以上、一家団欒、すなわち家族の共食について批判的にみてきた。このように、批判してもなお、私たち（特に、子ども）にとって家族との共食に意味があるのだろうか。そのことを述べる前に、動物学的知見や歴史的知見を度外視した上で、食卓の人間形成機能について過剰な意味づけを行う家庭言説を取り上げ、批判的に検討しておきたい。

ところで、子どもの食卓について考えるとき、必ず参照すべき原典として足立己幸の食生態学調査がある。足立は、従来の食事調査のように、子どもが家庭で「何を食べているのか」という食事内容だけを調査するのではなくて、「どのように食べているのか」、さらには「誰と

食べているのか」という食事空間（食卓）における人間関係（家族関係）まで含めた調査を実施した。この、栄養学の常識を覆す調査は、1982年と1999年の2回実施された。1982年の調査では<sup>7)</sup>、その当時、大人と一緒に食事をしていない子ども（小学生）が朝食で38.4%、夕食で16.7%いたという。そのデータは、NHKの特集で取り上げられ、子どもの「孤食」の実態が初めて明るみに出された。しかも、本調査で描かせた、一人食べる子どもたちの食卓の絵は、そのどれもが奇妙に寂しく、味気ないものばかりであった。

そして、18年後の1999年の調査では<sup>8)</sup>、大人と一緒に食事をしていない子ども（小学生）が朝食で50.9%、夕食で16.9%というように、1982年よりも増加したという。しかもショッピングなどに、1982年とは異なり、「孤食」が楽しいという子どもが少なくない上——食事に対する子どもたちの心理的変容——、親も親で子どもが孤食して何が悪いのかという聞き直りがみられるという。

このように、わずか20年足らずの間に、「孤食」は、子どもたちにとって悲惨で寂しいものからどちらかという、気楽で快適なものへと変容しつつある（孤食から個食への変容）。

なぜ、このように、子どもたちが孤食を好むのかというと、その理由は、「一人の方が気楽だから」、「親と一緒にだとウザつたいから」ということである。加えて、同じ「孤食」でも食堂や居間の食卓ではなく、自分の部屋でという「個室型」も増えている。「自分の部屋の方がゆっくり食べられるから」、「テレビを見ながら食べられるから」というのがその理由である。

一人で食べているということも「悲しい発見」であったが、そのメニューも驚くべき内容である。朝ごはんの例では、「おにぎりだけ」ならまだしも、「インスタントラーメン」や「ハンバーグ」、さらには「ケーキ」を食べている様子が描かれている絵がある。そして、「ポテトチップスとジュース」という間食のような朝食までもあった。

しかも、子どもの体調への影響についてみると、こうした食事が子どもの心身にのびきならない影響を及ぼしていることが判明した。まず、身体的自覚症状では、「頭が痛くなりやすい」が20%、「風邪をひきやすい」18%、「足が重い感じがする」が15%と多い。性別では、「便秘しやすい」と「頭がいたくなりやすい」で、男子より女子が多くなっている。次に、精神的自覚症状では、「だるくなりやすい」が24%、「夜よく眠れない」が22%と高率で、どちらの項目も女子が多い。

こうした研究成果およびそれがもたらす風潮に対して

——あらかじめいうと、これから述べる家庭言説は足立の食生態学調査を継承したものであるが、その意図をまったく誤解していると考えられるが——、食卓の有する人間形成機能を見直すという動きが出てきた。たとえば、カウンセリングや育児・教育の立場から、食卓とは、「ここが形成される場所（人格形成の場）である」とか、「子どもがそこで家族の会話や様子を見て、態度や言葉のセンスを自分のなかに取り入れていく場」等々である、と。要するに、食卓は、子どもにとってここを育てる場であり、コミュニケーション能力や対人関係能力を培う場であると見なされているのである。

その典型は、臨床心理学を専門とする室田洋子である。室田は、食卓のもつ特性について、①家族の人間関係が顕著に現れる場所である、②家族が最も近い距離に集まる場所である、③毎日数回、長年にわたり継続される場所であるとしたうえで、食卓の果たす役割の大切さについて次のように考えている<sup>9)</sup>。

室田を敷衍すると<sup>10)</sup>、子どもたちは、家族に話を聞いてもらうことでここを安定させていく。この最も効果的な場所が食卓である。一人で食べている子どもは、ここが癒されず、こころの健康も犯されてしまう。食卓では、家族が、お互いに話し、聞き、こころを温め合うような関係が大切なのである。人は食卓で何を食べるのかということであらためて問い直してみると、「人との関わり」、「心配り」、「安心感」、「問題解決の姿勢」、「わが家のセンス」、「善悪の判断基準」、そして、その「地域の文化」を食べているのだ、と。以上のことから、人間関係（家族関係）の核になる場所に食卓があると結論づける。家族のみんなのことを考えながらの食事は、何でもおいしく食べられるという。

ところが、家族が揃って食事をする機会がほとんどなくなることにより、「コミュニケーション機能」が無視され続けていくということは、そこで培われる「コミュニケーション能力」の低下が懸念される。子どもにとっての食事は、コミュニケーション能力の形成に深くかわるものだという。その理由として、食卓状況には常に、こころの経験に大きな影響を与える以下のような条件が、すべて備わっているからであるという。

家族が揃っての食事というのは、①一定の相手（気分、性格、気配り、会話の質）、②近い距離（表情、態度、言葉の裏が読みとれる近さ）、③一定時間（食事が終わるまでの時間。楽しい食事は長く気が重ければ早く退席）、④高い頻度（毎日、毎食、何年も繰り返される）という4つが内包された営みなのである。

また、コミュニケーション能力の低下により、人間関

係能力の貧困化は、その人（子ども）がいかに優秀かつ有能であったとしても肝心なところで自分を生かすことができない問題性をもつという。勉強はできたのに、いま、不登校、ひきこもり、拒食症、家庭内暴力などはどれも、コミュニケーション能力の低下と深く関係しているという<sup>11)</sup>。

「いま、子どもにとっての食事の意味はきわめて大きいものである。それは食事がたんに体に必要な栄養物を供給するという役割以上に大きな影響をあたえるものであるということはこれまでに述べてきた通りである。食卓で人は何を食べて（取り入れて）いるのだろうか。人はそこで、人とのかかわり方の質を食べて（取り入れ）いるのである。子どもたちは食事を誰かとともにとりながらそこで交わされている会話を聞き、そこにいる人たちの表情をよみ、雰囲気を感じ取り、その場面でおこっているさまざまな人間活動の意味を汲み取る経験を重ねている。つまり、ともに食事をするかかわりの過程のなかで、人は心の動かし方、心の立て直し方、気持ちの切り替えや会話のコツ、相手との間の取り方や話題の持ち方などコミュニケーションの中核となる力を得ていくのである。さらに、日常の食卓場面の人間関係を通じて、具体的に、社会の規範や文化、価値観、善悪の判断基準、家族やその属する集団が大切にしている考え方や感じ方、センスをくりかえし吸収し、その受け取り方を調整するという活動をしているのである。<sup>12)</sup>」

食欲と感情は、非常に関連が深いことが知られている。人間の感情は、出生に始まり、3歳ぐらいまでに学習が行われる。喜び、楽しみ、ある種の怒り、さびしさ、すべて生まれてからの学習による。この時期に、周囲の大人たちが子どもたちに対するとき、喜び楽しみを十分もっていれば、子どもは喜び、楽しみを学習する。反対に、さびしさ、悲しさ、怒りをもって子どもと接触したら、子どもは同じような負の感情を学習することになる。

人間は生きていく限り、生きていてよかったという気持ち、どこかにもつていることが必要である。愛にはぐくまれ、スキンシップも十分な子どもは、生きている証し、人に認められたい、人を引きつけておきたいという感情をもつことになる。

まさに、人と人のあいだ、ここでは家族が食卓を通して、心があたたかく交わされるコミュニケーションをしながら食事することこそが、心身に大切なのだと室田は考えている。そして、さまざまな背景・原因によって引き起こされる「孤食」という現象を考えると、このまま何もしなければ、子どもや、その子どもをとりまく人間関係、そして、その子どもの将来にまで大きな影を落

とす可能性が高いという。

しかしながら、こうした捉え方は——細かな問題点はさておき——、あまりにも心理主義的、教育主義的なものだと考えられる。見方を換えると、前述した足立の調査研究の評価すべき点は、室田の考えとは異なり、子どもたちが食事を「誰と食べるのか」を、食事の楽しさ、満足度、コミュニケーションよりも、それ以上に食事内容や健康状態と関連づけて捉えたところにある。この点はとりわけ重要である。その意味で足立は食生態学者なのであって、室田のように、食卓の人間形成機能やこころの結びつきを重視する臨床心理学者や臨床心理士（カウンセラー）ではないのである。それについては、後で調査データを通して詳述したい。

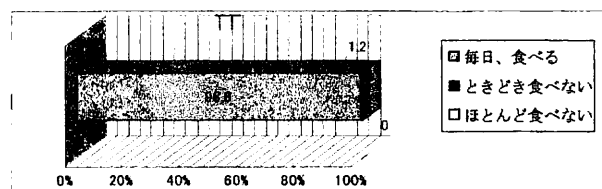
#### 4. 孤食（個食）はなぜ問題であるのか ——大阪市の調査研究から——

##### 1) 現在の子どもたちの食事空間の生態

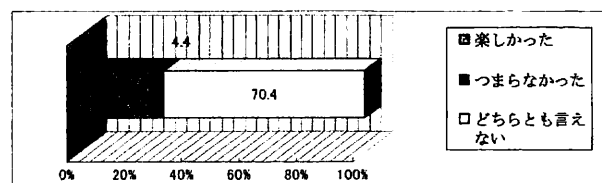
足立の食生態学調査の意義および家族の共食や食卓の重要性を述べるために、前述した生活実態調査のデータを手がかりにしたい。そのなかでまず、現代っ子の食生活問題として欠食・少食について言及したい。

グラフ1とグラフ2に示されるように、朝食を食べないことがある子どもが約9%を超えている。その主な理由として「おなかがすいていないから」、「気分がすぐれないから」、「時間がないから」、「朝食の準備ができていないから」が挙げられた。前三者が、子どもの夜型生活、すなわち生活リズムの乱れによる朝食抜きであるのに対して、後者は、ネグレクト（児童虐待の1つ）とでもいうべき、親の問題である。少数でありながらも、親の多忙な都市型生活によって犠牲になっている子どもがいることがわかる。それに対して、夕食については（ご

グラフ1 朝食は毎日、食べますか。



グラフ2 夕食は毎日、食べますか。

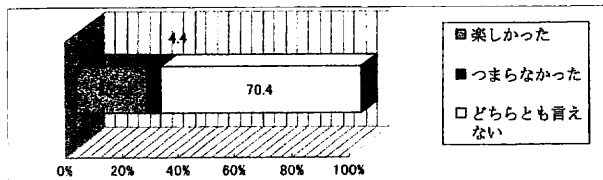




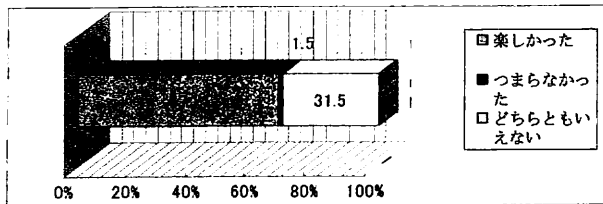
く一部に時々食べない子どもがいることは気懸かりであるが) 特に問題はみられなかった。

次に、食事は楽しかったか、つまらなかったかについては、グラフ3とグラフ4に示されるように、朝食を楽しかったとする子どもが約25%に過ぎず、夕食でも楽しかったとする子どもは約67%にとどまった。そして、朝食・夕食ともに「つまらなかった」というように、明確な否定を表す回答は少なく、むしろ「どちらとも言えない」との回答が多かった。「どちらとも言えない」と回答した小学生は、朝食で約70%、夕食で約32%もあった。「つまらなかった(楽しくなかった)」という回答が、楽しさを求めながらもそれが満たされなかったことの期待外れを表しているのに対して、「どちらとも言えない」という回答は、初めから楽しさそのものを期待していないことを表していると考えることができる。ここには、食事に対するいまの子どもたちの冷めた(アイロニカルな)態度が端的に表れている。

グラフ3 朝食は楽しかったですか、つまらなかったですか。



グラフ4 夕食は楽しかったですか、つまらなかったですか。

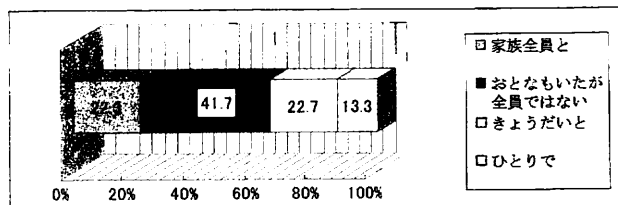


次に、食事を誰と一緒に食べたかについては、グラフ5とグラフ6に示されるように、朝食の場合、家族全員と食べた子どもが約22%と少ないが、それでも大人(誰か)と朝食と一緒に食べた子どもは(家族全員を含めると)約64%いることがわかる。

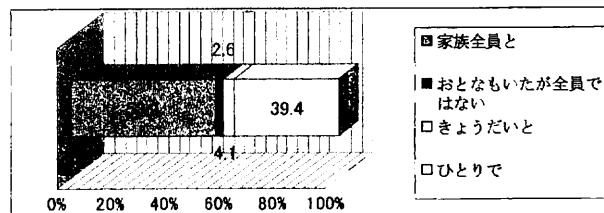
また、朝食を子ども同士(兄弟姉妹)でとっている子どもが約23%、一人だけでとっている子どもが約13%いる。朝食の取り方については均等ではないが、4つのパターンにわかれている。その理由は、朝は、両親は通勤、子どもは通学と慌ただしく、家族のなかで朝食をとる時間帯にずれがあることが想定されるため、子どもは、食事の時間帯が重なる大人や兄弟姉妹と一緒に朝食をとっているのではないかとと思われる。

それに対して、夕食の場合、家族全員と食べた子ども

グラフ5 朝食は誰とひとりに食べましたか。



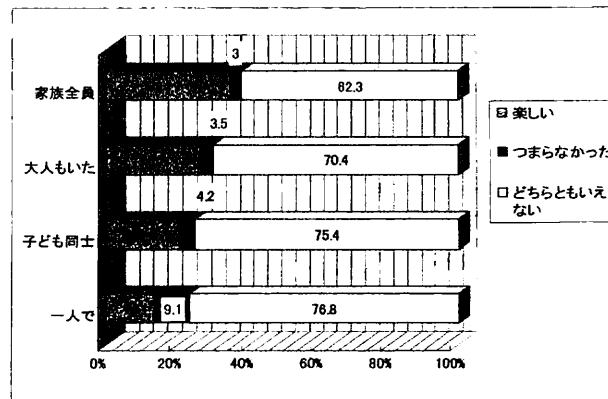
グラフ6 夕食は誰とひとりに食べましたか。



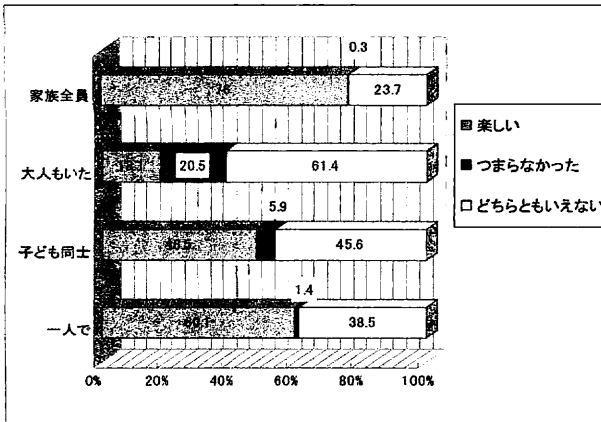
が約54%と朝食と比べると多いにもかかわらず、驚くべきことに一人だけで食事をとった子どもが約39%にも及ぶ。以上のことから、家庭によって差異が大きいことがわかる。総じて、子どもの孤食は夕食で深刻化している。

次に、「朝食を誰と一緒に食べたか」と「朝食は楽しかったか、つまらなかったか」をクロス集計すると、それはグラフ7とグラフ8のようになった。グラフからわかるように、朝食・夕食とも、(4つのタイプのなかで)家族全員と一緒に食べた子どもは、食事は楽しかったと最も多く答えている。その一方で、夕食の場合、自分一人だけで食べた子どもの約60%が楽しいと答えている。ここには、たとえば好きなテレビを観ながら、好きな時間に好きな場所で食事を食べることをエンジョイする現代っ子の様子が端的に表れている。都市型の個人主義的なライフスタイル(シングルライフ)が子どもの一部に浸透していると推測できる。また、前述したように、「どちらとも言えない」という回答がすべての類型に多く見られる。いまの子どもたちは誰と一緒に食べようとも、

グラフ7 「朝食を誰と一緒に食べたか」×「楽しかったか、つまらなかったか」



グラフ8 「夕食を誰と一緒に食べたか」×「楽しかったか、つまらなかったか」

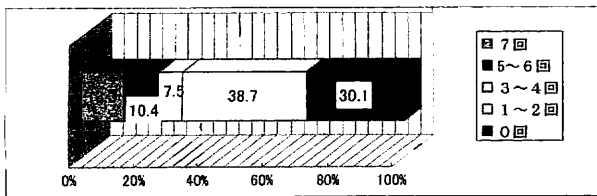


家族の者と共食することに何ら期待を抱いていないのかも知れない。

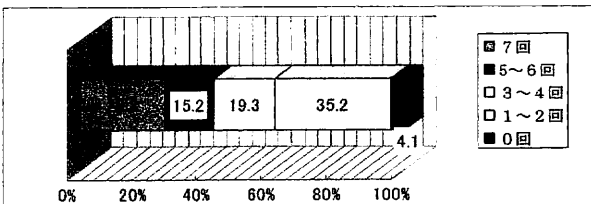
次に、いまの子どもたちは、どのくらい食事を家族と一緒に食べているのか、すなわち家族との共食回数的情況について言及したい。

グラフ9とグラフ10によると、子どもたちは、1週間の内、家族一緒に朝食をほとんどとっていない者（1週間の内、家族との共食が0～2回/土・日）が約69%（約7割）もあり、そのなかで1週間に家族一緒に一度も朝食をとっていない者（0回）が全体の30%を超えていた。夕食は朝食ほどではないが、それでも1週間の内、家族一緒に夕食をほとんどとっていない者（1週間の内、家族のとの共食が0～2回）が40%近くもいた。しかも、子どもが朝食または夕食を食べている最中、親がすぐそばに居るにもかかわらず、親はテレビや雑誌をみたり、洗濯物を干したり、家や庭を掃除したりして、勝手に子どもに食べさせているケースも多々みられた。

グラフ9 朝食を家族そろって食べるのは、一週間のうち、何回ぐらいですか。

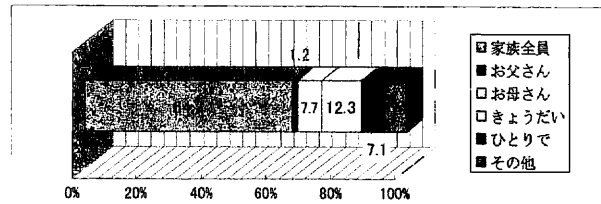


グラフ10 夕食を家族そろって食べるのは、一週間のうち、何回ぐらいですか。

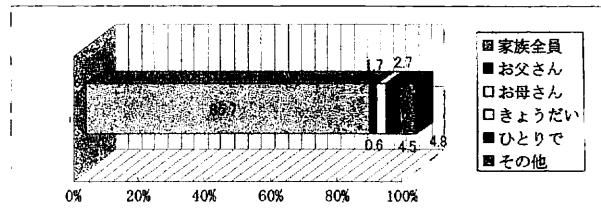


その一方で、グラフ11とグラフ12からわかるように、朝食・夕食とも家族と一緒に食べるのが一番楽しいと答えた子どもが朝食で約65%、夕食で約85%と高く、ここに食事や食事意識に関して大人（親）と子どもとのあいだに顕著な違いがみられた。また、大人（家の人）がいなくても、兄弟・姉妹同士だけで朝食や夕食をとる者が一番楽しいと答えるものも多かった。このように、孤食や子どもだけの食事が浮き彫りになる反面、前述したように、一人で食事をするのが一番楽しいという子どもも、朝食で約7%、夕食で約5%もあり、都市型の個人主義的なライフスタイルが子ども（小学生）にも浸透・定着していることが推測できる。

グラフ11 朝食を誰と一しょに食べるときが一番楽しいですか。



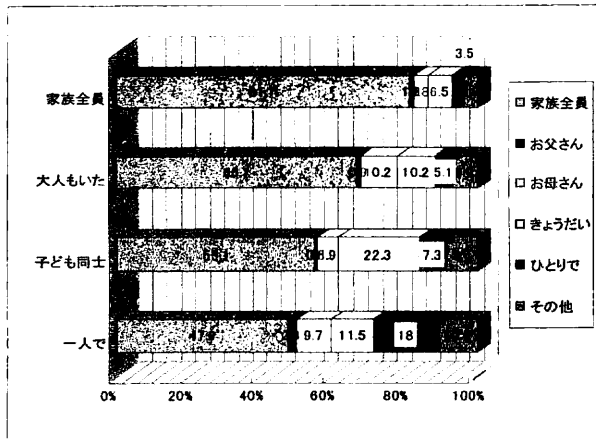
グラフ12 夕食を誰と一しょに食べるときが一番楽しいですか。



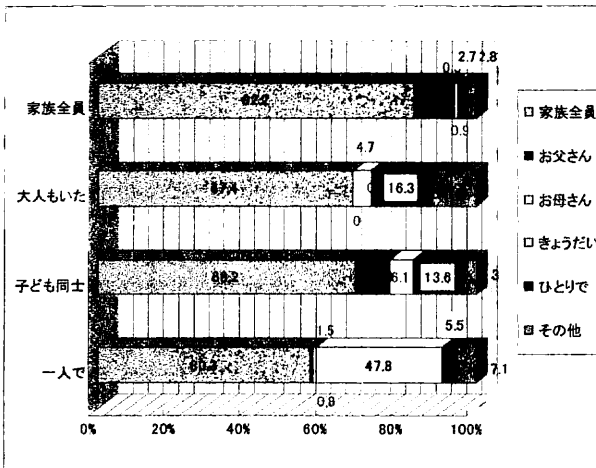
次に、「食事を誰と一緒に食べたか」ということと、「誰と一緒に食べるときが一番楽しいか」ということとの関係を示したのが、グラフ13とグラフ14である。

この質問項目は、子どもからみた共食の現状と（誰と食べると一番楽しいかという）希望の関係を調べたものである。グラフのように、家族全員で食事を食べた子どもの場合、朝食で約81%が、夕食で約92%が、家族全員での共食が楽しいと答えている。ただ、それ以外の3つのケースでも、家族全員での共食が一番楽しいと回答している。特に、その傾向は夕食で高い。前述した結果のなかで、夕食を一人で食べた子どもの約60%が（食事が）楽しかったと回答したが、グラフ14を見る限り、夕食を一人で食べる子どももまた、家族全員での食事を希望していることがわかる。食事が楽しいかつまらないかということと、誰と一緒に食べるときが一番楽しいかということとは、子どもにとってまったく別の意味合いを持つことが推測できる。

グラフ13 「3-1朝食を誰と一緒に食べたいか」×「5-1 誰と一緒に食べる時が一番楽しいか」



グラフ14 「3-2朝食を誰と一緒に食べたか」×「5-2 誰と一緒に食べる時が一番楽しいか」



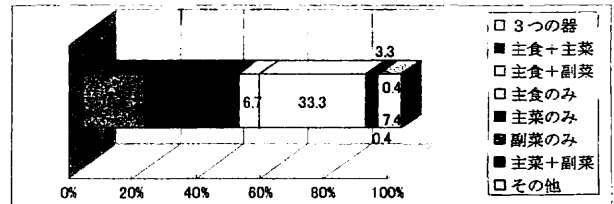
2) 食事内容からみた子どもの食事の問題点

1) では主として、家族関係から子どもの食事をみてきたが、次に、食事内容およびそれに関するデータを中心に子どもの食事の現状を見ていきたい。

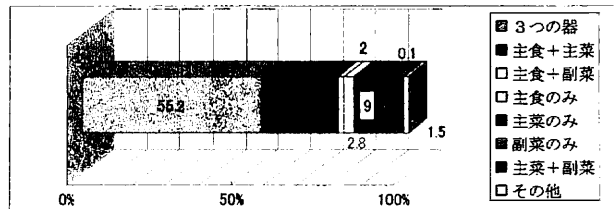
グラフ15とグラフ16から、家庭での、子どもの食生活、すなわち食事内容（献立）と主食のタイプ（ごはん／パン／その他）について次のことが判明した。

第1に、朝食の献立を分析すると、子どもたちの内、主食、主菜、副菜、いわゆる「3つの器」をバランスよくとっている者は、約20%に留まった。主食と主菜の両者をとっている者でさえ、約29%に留まった。従って、朝食に主食と主菜をとっている者は全体(1,700名)の内、825名(約50%)しかおらず、子どもたちが朝、十分な食事をしていないことがわかる。また、主食のみと答えた者が約33%もいた。その大半は、79%がパン食であった（別の集計でパン食をしている子どもの大半が、主菜

グラフ15 「何を食べたか(献立)」×「主食の種類」



グラフ16 「何を食べたか(献立)」×「主食の種類」



なしの、パンと牛乳のみであった）。

第2に、朝食の献立をみる限り、子どもたちの内、ごはんを主食とする者が、約37%、パンを主食とする者が、約51%であり、大半の子どもたちがパン食中心の朝食をしていることがわかった。また、驚くべきことに、ケーキ類・菓子類（菓子パンも含む）などを朝食とする者が205名(約12%)もあり、自分の好きなものだけを食べる、いわゆる「個食」——家族単位でいうと、「バラバラ食」——の現状が明らかになった。

第3に、夕食の献立を分析すると、子どもたちの内、主食、主菜、副菜、いわゆる「3つの器」をバランスよくとっている者は、約55%であり、1つ目で述べた朝食とは異なり、夜は、バランスが良く、栄養のある食事をしていることがわかった（夕食重視の傾向）。また、「3つの器」とまではいかないが、主食と主菜をとっている者も、約23%いた。従って、夕食に主食と主菜をとっている者は、全体(1700名)の内、1326名(約78%)いることになる。そのことから、子どもたちは夜、十分な食事をとることで、一日の栄養を補給していることがわかる。ただ、それ以外の子どもたちの内、主食なしの食事をしている者が289名(約17%)もあり、彼らの健康状態が心配される。なかには、たこ焼きをはじめ、一般に食事とは見なされないものを夕食とする者が17名(約1%)もあり、家族の食事観または食事意識の低下が懸念される。

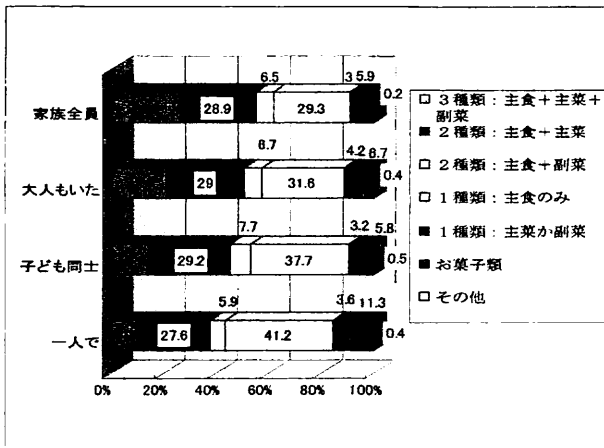
第4に、夕食の献立をみる限り、子どもたちの内、ご飯を主食とする者が、約77%、パンを主食とする者が、約1%であり、大半の子どもたちがご飯中心の夕食をしていることがわかった。その一方で、麺類（うどん、そば、スパゲティなど）のみを夕食とする者が378名(22%)もあり、現代っ子にとって主食が必ずしもご飯ではなく、

小麦を原料とする麺類に広がっていることがわかった。

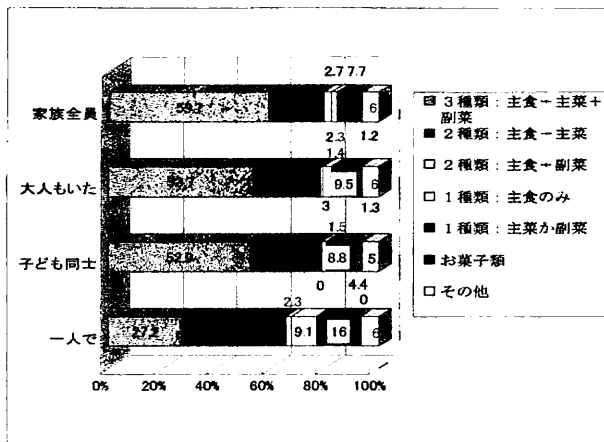
結論から先に述べると、朝食・夕食ともにバランスのとれた食事をしている子どもたちの方がそうでない子どもたちよりも、家族関係が充実しているということがわかった。日本人の場合、全般的に朝食は軽めにとる傾向があるので——本調査でも朝食の献立は少な目であった——、ここでは夕食を中心に言及したい（グラフ17は朝食であり、参考程度に留めたい）。

グラフ18（夕食）からわかるように、家族全員と一緒に食べた子どもの方がそうでない子どもよりも、食事内容面ではるかに充実している。つまり、家族全員と一緒に食べた子どもの約60%が主食・主菜・副菜といった「3つの器」の揃った食事をとっている。たとえ、家族全員が揃わなくても大人と一緒に食べた子どもの約54%が「3つの器」の揃った食事をとっている。

グラフ17 「誰と一緒に食べたか」×「何を食べたか」：朝食



グラフ18 「誰と一緒に食べたか」×「何を食べたか」：夕食



それに対して、子ども一人だけで食べた場合、「3つの器」が揃っているのは、約27%と低い。つまり、子ども一人だけの食事の場合、料理数が少なく、献立も貧

弱である。これとは別に、料理数（品数）を個々の子どもごとにカウントしたデータによると、家族全員一緒に夕食では、平均4.7料理（主食を含む）であるのに対して、子ども一人だけでは平均2.3料理に過ぎなかった。一般的にいうと、主食を含め品数が3品以下の場合、使用する材料の種類、味の変化などが乏しく、栄養面でも問題も生じるのではないかと考えられる。

このように、子ども一人だけの食事（特に、夕食）だと、主菜と副菜の揃っていない食事の占める割合が多くなる。この場合、特に、副菜のない食事が多い。夕食の場合、料理数の少なさは、単に数が少ないというだけでなく、食事の核を成す料理が欠けていることが少なくない。孤食の場合、グラフを見る限り、主食+主菜は約39%と極端に低くはないが、それでもタンパク質を含む料理である主菜がない割合が、約34.2%、野菜や汁物など食物繊維を十分に含む副菜がない割合が、約70.5%、と各々高い。夕食は、一日の内でも料理数が多く、3種類の料理（「3つの器」）が揃うことが多い。にもかかわらず、子ども一人だけの食事ではそうした料理が揃う割合が低く、子どもの健康が懸念される。

以上みてきたように、子どもからみて（夕食を家族全員でとるという意味で）家族関係がうまく機能している家庭の方がそうでない家庭よりも、食事内容が充実していると考えられる。見方を換えれば、孤食は、子どものこころの側面以前に、子どものからだの側面（健康面）において大変深刻な問題であると考えられる。

### 5. 一家団樂の変容と多様化

—現代家族のライフスタイル—

以上みてきたように——最重要な事柄であるため、再度強調しておく——、子どもからみて夕食を家族全員でとる家庭の方がそうでない家庭よりも、はるかに食事内容が充実していた。食生活において家族団樂が必要だとすれば、それは、子どものこころの発達という抽象的な目的のためではなく、むしろ家族全員または家族（大人）と一緒にとる食事が子ども一人または子ども同士でとる食事よりも、はるかに充実しているからである。何よりもそのことを裏づける調査結果が出ていることは、看過し得ない。家族同士での共食が家族団樂の「最後の砦」といわれるが、だからといってそれに過剰な期待をかけることには無理がある。失われつつある家族のメンタルな結びつきは、家族での共食だけでなく、住まいにおける家族同士の普段のコミュニケーションを通してしか形成され得ないのである。繰り返し強調すると、孤食

は、子どものこころの問題である以上に、子どものからだ（健康）の問題なのである。

そして、家族の共食の意義についてあらためて次に挙げるとすれば——食事内容の充実面という基準からみると、取るに値しないにもかかわらず——、次の通りである。すなわちそれは、食事づくりに子どもがかかわる（参加する）ことの意味である。

ここで、食事づくり、特に食事を準備する段階から子どもがかかわっていることを考えてみよう。家族全員揃う食事には、全員分のすべての料理が同時に食卓に出ることになる。ごはんやみそ汁も何人分かを次々に盛って食卓に出す。それに合わせて箸や小皿などの細かい食具も用意される。1人用、2人用の食卓を整えるのに比較し、一定時間内にする作業量ははるかに多い。しかもその分、長い時間をかければ、せっかくの料理が冷めてしまう。すべての料理ができあがる時刻、できあがってから食べ始めるまでの時間は、食べる人数の多少にかかわらず、ほぼ同じくらいが望まれる。とすれば、多人数が一緒に食事であれば、ただ量が多いという以上に、集中的に手間のかかる時があることになる。

子どもが食事づくりにかかわっているのは、親の教育的意図によるばかりでなく、このような食事という場づくりの特徴によるものと思われる。このような場面に子どもがかかわるとき、単に「お手伝い」という範囲を超え、食べる人間のひとりとして食事づくりに参加することに驚き、実感することになると考えられる。

子どもが食事づくりにかかわることの食欲形成への意味については、次の3点を挙げることができる。

第1は、調理の段階にかかわることは、食物の色、香り、音など食につながる五感がより刺激を受けることである。消化器官もそれにより食物が入ってくる受け入れ態勢をとることになる。食事をするとき、生理的によりスムーズに食が進むのを助ける。この体験は、食事をより快く感ずることになり、食べることへの健康な欲求を生むことになろう。

第2には、食事づくりの驚きや楽しさを実感することである。調理そのものがきわめて変化に富んだ創造的な行為だといわれている。エビを湯がけば赤くなり、ブロッコリーはさっと鮮やかな緑になる、小麦粉も水を加えて練れば団子になり、のばして切れば長いうどんになる。こうした変化は、子どもたちにとって実に新鮮で驚きに値するらしい。こうしたものが私たちの食物である。それは、食物そのものをもっと知りたいという関心を高める機会となり得る。それは食べようという欲求を育てる出発点だと考えられる（冒頭で述べた、食欲がない子ども

への対策となり得る）。

「家族と一緒に食べる」ことの意味とは、食事内容（献立）、3つの器のバランスや豊かさ、食事作りにかかわることに伴う、食欲の増進である。そして、「家族と一緒に食べる」ことの意味を生かすために、いくつか考えねばならないことがある。

第1に、家族と一緒に食べることと、外で一緒に食べることは少し異なるのではないかとこのことを充分認識することである。外食で食事をするときには、食事づくりへのかかわりがほとんどない。しかも、家族は各々、好きな料理を選び食べることもよくある。いまや、家族の孤食はあたり前。たとえ家族全員が同席している食卓でも勝手なものを食べる「バラバラ食（個食）」が普通という状況なのである。このように、「家族と一緒に食べる」ことによる食事や食事づくりの特長は、外食においてはほとんどみられないのである。ただ急いで付け加えると、前述したように、ファミリーレストランでの家族との外食は、子どもにとって親から叱られる可能性が少ないという意味で自由かつ安心な一家団欒なのである。

第2に、「一緒に食べる」ことと、食事時に一緒に「居る」こととは違うのではないかとこのことを充分認識することである。というのも、前述した特徴は「一緒に食べる」からこそ生じていると思われるからである。「一緒に食べる」ことは、単に「一緒に」「食べる」という動作を指しているのではない。また、単に楽しいなどの心理的効用だけを意味しているのでもない。抽象的な言い回しであるが、それは、家族と一緒に食べる食事の場づくりとその場を共有するという——一連の要素を包み込んだ——、ひとつのまとまりのある生活行為なのである。

「一緒に食べる」ことは、そうした生活行為の典型である。ただ、その言葉に込められた意味を字義通りに理解してはならない。「空白を読む」と同様、その隠された意味を理解することが必要である。一方、家族との共食で注意すべきことは、たとえば夕食時刻が少し遅く、量的に多すぎることもあるということである。家族により多彩な料理が求められたり、一定の時間内に調理するためか、調理済加工食品の利用の高い人も少なくない。

第3に、データ分析を介して確認したように、一般に、家族全員一緒に食事の方は、料理数が多く、その組合せも、栄養面と味面で好ましいということである。それ以上に、複数人の食事、特に年齢や健康状態、好みの異なる人が一緒に食事は、異なる栄養要求と味要求を満たす内容が求められる。

最近では、「複」数の世代が集まり、「複」数の素材（食

材)を「複」数の人たちで食することを「複食」と呼ぶということであるが、基本的には三世代(祖父母—父母—子)が家で一緒に食事することが、「複食」文化の原型だといえる。

その結果、登場する料理が日本風と外国風、味わいもこってりとさっぱりというように、違うもの、使う材料も異なる種類のものが組み合わせられることになる。それが料理数を増し、栄養素バランスや料理バランスを好ましいものにするにつながると思われる。

このような料理構成の食事は、一般的に考えてみても食欲形成にプラスの意味をもつと考えられる。一回の食事に多様かつまとまりのある料理を食べるので、恐らく、食事のリズムも形成される可能性が高い。栄養素バランスも良好であるがゆえに、食欲の発生基盤となる生理的状态をつくることになる。味わいの異なる料理の組み合わせは、食味を増し、床面での満足をもたらす可能性は高い。

年代や世代の異なる人の好む食物を日常的に目にし、味わうチャンスがあることは、食嗜好を広げ、食べられる食物の範囲を広げることになるとともに、食べようという欲求の対象を広げることになる。つまり、複食文化の創造が求められているのである。

それでは、以上述べてきた、家族での一家団欒や共食についての分析と考察を踏まえながら、次に、子どもたちが描く「食卓の絵」の質的アプローチを通して、子どもと家族とのかかわりやその生態、家族観、さらには食卓のあり方について考察していくことにしたい。

## Ⅱ. KFD法による絵の分析

### 1. 表現内容から見た分類

前述した「食卓の家族論」を踏まえた上で、実際に子どもたちに描いてもらった「食卓の絵」を分析することによって彼らの食卓の現状について考察していくことにする。なお、子どもが描く「食卓の絵」に関する本調査は、大阪市と東京都の子どもたち、合計1,436名に対して実施し、その内、410名から有効回答を得た(有効回答率、28.6%)。なお、本調査の有効回答率が低かったのは、小学校で実施した場合など、調査時間の制約や諸事情のため、絵を描くのに十分な時間が与えられなかったこと(絵を完成できなかったケースも含めて)、絵を描かず文章で書いた子どもが多かったこと、さらに、最近の子どもの中に絵を描くことができない者も少なくないことなどが挙げられる。とはいえ、「食卓の絵」は、量的

分析よりも質的分析に向いていることから、410というデータ数は分析するのに十分な数であると判断した。

以上のようにして収集した、子どもが描く「食卓の絵」は、臨床心理学分野で定評のある「動的家族画(Kinetic Family Drawings; KFD)」<sup>13)</sup>法に基づいて分析・分類していくことにした。以下、「動的家族画」法をKFD法と略記する(なお、ここでは「動的家族画法」もしくは「動的家族描画法」に関する理論的検討は省略し、分析結果のみを記述したい)。

ところで、KFD法によると、個々の子どもによってさまざまに表現された「食卓の絵」は、表現内容からみて8つにわけることができる。なお、各々の典型的なタイプを次に各1例ずつ示した。それは図1<sup>12)</sup>のように示される。

まず1つ目は、「コミュニケーション充実型」の絵である。このタイプの絵の場合、人物に表情や動きがあり、8つに分類した表現内容の内、唯一安定した普通の家族関係を示す絵である。

2つ目は、食物ばかりが描かれていて、家族の人は描かれていない。あるいは家族の人が描かれていても、極めて小さく描かれていて、食物が強調されているような絵である。このような絵は、親から食べることを強制されていることを訴えている絵にみえる。

3つ目は、「関係貧困型」で家族の人たちは「人じるし、人マーク」になっている。このような絵は、家庭内のコミュニケーションの乏しさ、家庭内での人間関係の貧困さを投影している絵であると考えられる。

4つ目は、だるまさんのように人間から手が出ていない絵である。この絵の特徴は、「意欲希薄型」であり、この場合、手が描かれていないということは、意欲がないことを表している。つまり、意欲がないということは意欲がない、そういう状況を示す絵であると考えられる。

5つ目は、「枠からはみ出す人物型」である。子どもは怒りや攻撃的な気分があるとき、枠からはみ出す絵を描く。または、そのような傾向にあるといわれている。

6つ目は、「辺縁位、隅の食卓型」である。それは拠り所がなく、落ち着き場所を求める気持ちがあるときに描く絵である。つまり、このタイプの絵は誰かに寄りかけたい、寂しいというときに描く絵である。

7つ目は、「人物包围型」の絵である。全体を丸で囲んでいるようなもの、そうした絵もやはりこのパターンに入ると考えられる。

8つ目は、「強調型」で「人物下線、一人強調」の絵である。自分を見て欲しい、自分への注目を求めていることを示す絵であると考えられる。

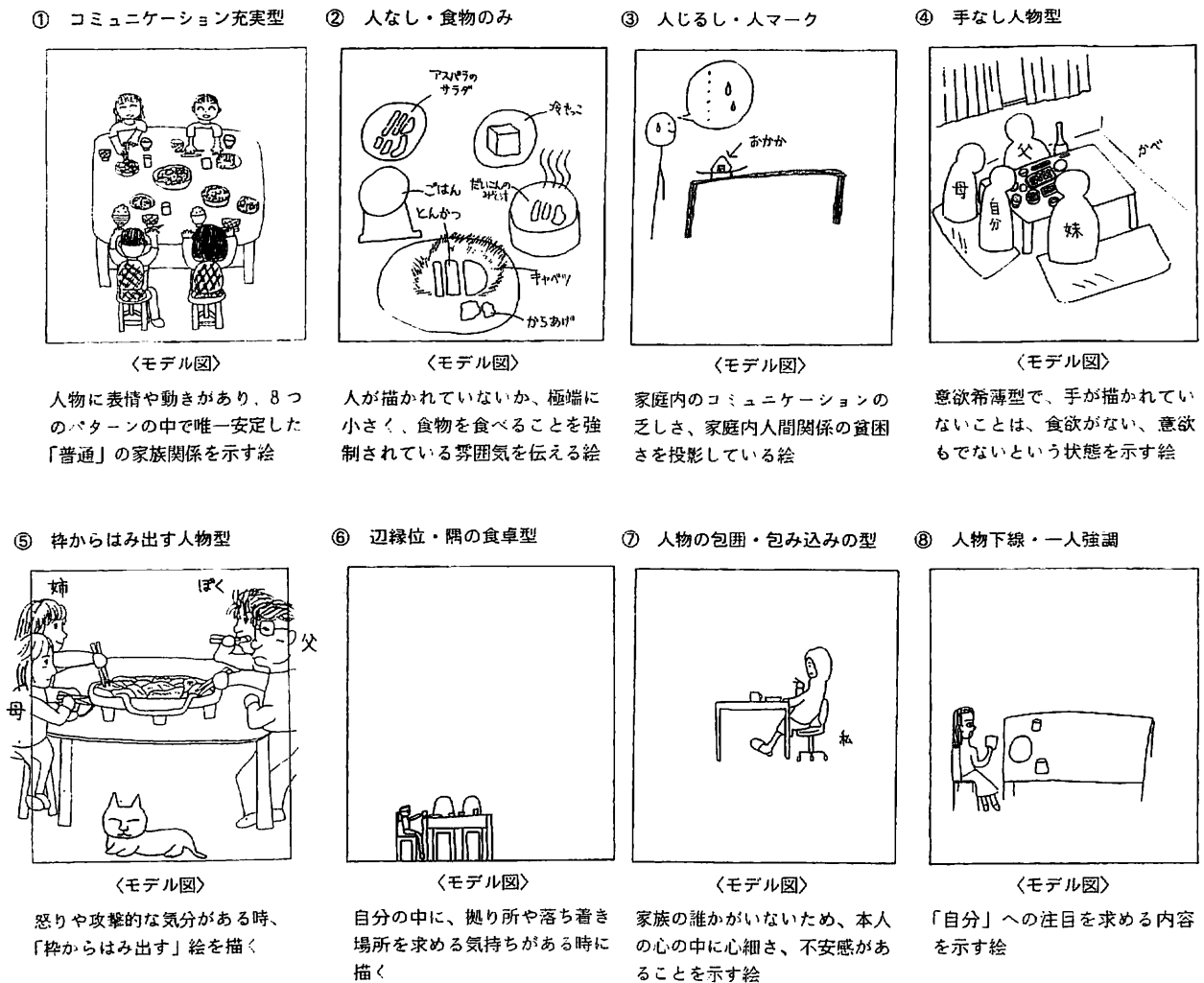


図1 表現内容からみた「食卓の絵」の分析

表1は、(本分析を行うにあたって比較検討した)2003年に埼玉県で行われた調査と2004年に東京・大阪で行った調査について、表現内容の8分類ごとに数値と割合を示したものである。2004年に東京・大阪で行った調査については、筆跡が薄すぎるなどして読み取り不可能なものが5枚ほどあり、それは数値に含んでいない。

本調査(2004年東京・大阪)について、表現内容の8

表1 表現内容からみた、子どもが描く「食卓の絵」の分類とその結果

表現内容	(2003年埼玉県)		>	(2004年東京・大阪)	
	人	%		人	%
①コミュニケーション充実型	243	38.2	>	144	35.3
②人なし・食物のみ	96	15.1	>>	16	3.9
③人じるし・人マーク	185	29.1	<	141	34.6
④手なし人物型	26	4.1		18	4.4
⑤枠からはみ出す人物型	6	0.9		2	0.5
⑥辺縁位・隅の食卓型	59	9.3		37	9.1
⑦人物の包囲・包み込み型	11	1.7	>	2	0.5
⑧一人強調	10	1.6	<<	45	11.0
⑨その他	0	0.0		3	0.7
合計	636	100.0		408	100.0

\*読み取り不可能:5人

つの分類からみると、①「コミュニケーション充実型」は全体の3割以上で、145人である。次に多かったのが③「人じるし・人マーク型」で、142人である。これは「コミュニケーション充実型」とほぼ同数である。次は、自分への注目を求める内容を示す⑧「一人強調型」が約1割で45人である。それ以外は⑥「辺縁位・隅の食卓型」が37人、④「手なし人物型」が18人、②「人なし・食物のみ」が16人である。

さらに、本調査を相対的にみるために、表1のように「さいたま・生協とくらしの研究所」によって、2003年に埼玉県で実施された「子どもの食生活しらべ調査報告」の結果を参照した。

2003年埼玉県と本調査を比べると、「コミュニケーション充実型」の割合が38.2%対35.4%となり、同じく家庭内のコミュニケーションの乏しさ、家庭内人間関係の貧困さを投影している「人じるし・人マーク型」の割合が29.1%対34.6%となっていることがわかる。また、埼

玉県の調査では1.6%であるのに対して、「一人強調型」が本調査では11.0%であった。

以上のことから——勿論、地域差は大きいといえるが——、「コミュニケーション充実型」が減っているといえる。

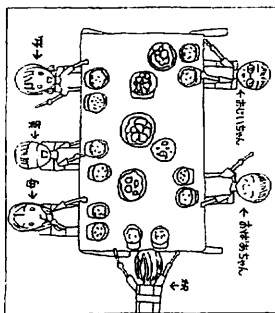
## 2. 表現形式から見た分類

次に、同じくKFD法に基づきながら、今度は表現形式からみた分類を行いたい。

あらかじめ述べると、表現形式からみて、子どもが描く「食卓」の絵は、3つに分類することができる。それは図2<sup>13)</sup>のように示される。

1つ目は、「安定型」で用紙に対して大きさが調和していて力強い筆圧で描かれている。そのためこのタイプの絵の場合、描き手の気持ちの安定が伝わってくる。

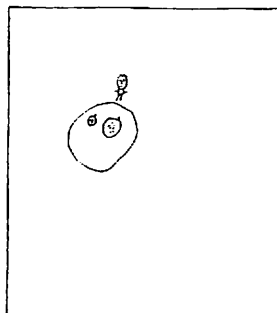
① 大きさ・筆圧安定型



〈モデル図〉

用紙に対して、大きさが調和していて、力強い筆圧で描き手の気持ちの安定が伝えられる絵

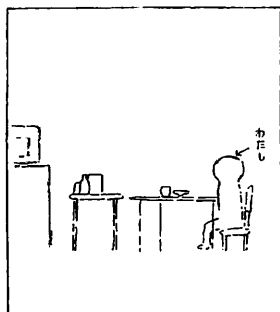
② 人物萎縮型



〈モデル図〉

描き手の心が萎縮していたり、心細く自信のない状態を示している

③ 消し書き・弱い筆圧



〈モデル図〉

自分自身への評価を強く意識するため、ためらいや自信のなさが垣間見られるもの

図2 表現形式からみた「食卓の絵」の分析

2つ目は、「人物萎縮型」である。このタイプの絵は、構図が全体と比較して小さ過ぎるもので、描き手の心が萎縮していて、心細く自信のない状態を示しているような絵である。

3つ目は、消し書きや弱い筆圧で描かれたものである。自分自身への評価を強く意識するため、ためらいや自信のなさが垣間みられる。つまり、人から自分がどう評価されているかということ強く意識し、また失敗しないようにということ意識するために、これでよいか、これではダメかというようなためらいが生じて、消し書きや弱い筆圧の絵になると考えられる。

表現形式についていうと、本調査では①「大きさ・筆圧安定型」の絵を描いた子どもが52.0%と約半数であった。予想に反して多かったのが④「その他」で33.2%であった。このように「その他」が多くなった理由は、3つの分類のどれにもあてはまることなく、乱雑や投げやりな筆跡のものが少なくなかったからである。そして、自分自身の評価を強く意識するため、ためらいや自信のなさが垣間みられる③「消し書き・弱い筆圧」は8.5%で、②「人物萎縮型」は6.3%と各々、少なかった。

表現内容の場合と同様、本調査を相対的にみるために、全国で実施された調査と比較した。それが表2である。なお、1995年全国の調査は、室田洋子の「子どもの食生活調査の分析会議」における結果に基づいている。2002年全国は、日本生活共同組合連合会が全国調査を行った結果である。2003年は前述の通り、埼玉県で「さいたま・生協とくらしの研究所」が行った「子どもの食生活しらべ調査報告」の結果である。

さて、表2を見ると、最初が1995年に全国で調査したもので「大きさ・筆圧安定型」が82.8%であった。次が2002年の全国で調査したもので45.9%とかなり低い。2003年の埼玉県における調査の結果は59.3%であり、本調査では52.0%である。「人物萎縮型」、「消し書き・弱い筆圧」はともに、1995年全国の調査と2002年全国の調査を比べると、その割合が「人物萎縮型」が10.4%から18.3%へ、「消し書き・弱い筆圧」が6.9%から23.3%へと各々増加している。そして、2002年以降は割合が徐々に低くなる傾向にある。本調査では、「その他」が33.2%と、2002年全国の12.5%や2003年埼玉県の8.6%と比べると割合がかなり多い。

本調査において「その他」の内容が、乱雑や投げやりな筆跡のものがほとんどであったことから



表2 表現形式からみた、子どもが描く「食卓の絵」の分類とその結果

表現形式	1995年 全国(%)	2002年 全国(%)	2003年 埼玉県(%)	2004年 大阪・東京 (%)
①大きさ・筆圧安定型	82.8	45.9	59.3	52.0
②人物萎縮型	10.4	18.3	18.6	6.3
③消し書き・弱い筆圧	6.9	23.3	13.5	8.5
④その他		12.5	8.6	33.2

考えると、2002年、2003年と比べても乱雑や投げやりに書く割合が増えたと考えられる。

### 3. テレビが描かれている食卓の絵の分析

ところで、子どもが描く「食卓の絵」にはテレビが多く描かれている。そこでKFD法に基づく子どもの絵の分析とは少し離れるが、「テレビが描かれている絵」を通してテレビによる家族関係について考察していきたい。

表3は、子どもが描いた「食卓」の絵の中で、テレビが描かれている絵に関する数値を示したものである。本調査において描かれた絵の内、19.8%にあたる81枚の絵にテレビが描かれていた。それは、5枚に1枚の割合である。絵に描かれていないが、食事の場でテレビをつけている家庭はもっとあるものと推測できる。

ここで気になったのは、自分や家族、食物よりもテレビを丁寧に描いた絵が多かったことである。テレビが描かれている絵のなかで、表現内容として最も多かったのは43.2%の「人じるし・人マーク」で、その次に多かったのは、「コミュニケーション充実型」で42.0%である。全体と比べると、全体の「人じるし・人マーク」は34.6%であるのに対して、「コミュニケーション充実型」は35.4%である。このことからテレビの描かれた絵に

表3 テレビが描かれた「食卓の絵」のタイプとその結果

テレビが描かれている絵	人全体に占める割合(%)	
	人数	割合(%)
	81	19.8
	AIに占める割合(%)	
①コミュニケーション充実型	34	42.0
②人なし・食物のみ	1	1.2
③人じるし・人マーク	35	43.2
④手なし人物型	3	3.7
⑤枠からはみ出す人物型	0	0.0
⑥辺縁位・隅の食卓型	2	2.5
⑦人物の包囲・包み込み型	0	0.0
⑧一人強調	6	7.4
⑨その他	0	0.0
①大きさ・筆圧安定型	46	56.8
②人物萎縮型	2	2.5
③消し書き・弱い筆圧	8	9.9
④その他	25	30.9

において「コミュニケーション充実型」の割合が高いということがわかる。

表現形式では、最も割合が高かった「大きさ・筆圧安定型」で56.8%、その次が「その他」30.9%となっている。それに対して、全体の表現形式では、「大きさ・筆圧安定型」が52.0%、「その他」が33.2%であることから、テレビが描かれた絵において、「大きさ・筆圧安定型」の割合が高いということになる。

以上のことから、現代の家族はテレビを媒介とすることにより、食卓のコミュニケーションが充実し、安定化しているといえるのではないか。その反面、テレビなしでは、家族のあいだでさえも、コミュニケーションをとりにくくなっているという現状があると考えられる。

### 4. コ食の分類

ここでコ食というのは、「孤食」、「個食」、「子食」を総称して表したものである。

「孤食」とは、子どもが一人だけで食事をするこゝである。つまり、家族とは食べないということである。それは、足立己幸が1981年に実施した食生態学調査で明らかにしたものであり、足立自身が指摘するように、子ども一人による寂しく、わびしい食事(食卓)を表す言葉である。

これに対して「個食」とは、親が側で見ている、または同じ部屋のなかにいるのにもかかわらず、子どもが一人で食べている状態である。そのとき親は何をしているかという、たとえば同じテーブルには座ってはいるものの、テレビを観ていたり、キッチンで洗い物をしていたりするのである。親と子どもが同じテーブルに座っている場合は、子どもが食事をしていても親の前には食事が置かれていない。それは、子どもが習いごとや塾で遅れて帰ってきて、ご飯を食べさせているという状況なのかも知れない。元々、「個食」は、自分が好きなものを好きなときやところで食べること(ただし、家族と共食する場合も含む)を指す。その場合、寂しく、わびしい「孤食」とは異なり、この言葉には、子どもが個人主義的なライフスタイルとして一人食べをエンジョイするというニュアンスが含まれている。

次に、「子食」とは、子どもたちだけで食事をしている状態を指す。親の姿はなく、兄弟姉妹で食事をしている。親が帰ってきていないのか、親はいるが別のことをしているのかはわからない。いずれにしても、子どもたちだけで食卓を囲んでいるという状況が子食なのである。

次に、表4は、子どもが描いた食卓の絵のなかで、コ食の絵について数値に示したものである。コ食については、一人きりで食べている「孤食」、親が側にいたり家事をしたりして同じ絵のなかにいるが、子どもが一人きりで食べているものを「個食」、親は絵のなかに見えず子どもだけで食事しているものを「子食」とした。ここでは、これらを合わせて「コ食」とする。この分類は、あくまで「食卓の絵」を分類するための基準に過ぎず、現実そのものではないと述べたい。

表4 コ食の絵の比較分析

コ食	(2004大阪・東京)		(2003年埼玉県)	
	全体に占める割合(%)	人	全体に占める割合(%)	人
	14.1	58	11.0	70
	コ食に占める割合(%)			
孤食	77.6	45		
個食	19.0	11		
子食	3.4	2		

表5は、子どもが描いた「食卓の絵」のなかで、一人の絵を描いた子どもたちの絵に関する結果を表したものである。本調査と、2003年埼玉県で行った調査との、割合と数値を比較した。また比較しやすいように、一人の絵を描いた子どもたちの絵に関する表の横に、本調査と2003年埼玉県各々の、子どもが描いた「食卓」の絵全体の表現内容、表現形式の割合と実数も示した。

本調査の一人の絵を描いた子どもたちの絵で、表現内容の8分類のなかで一番多かったのは「一人強調」で58人中42人の72.4%であった。次に「辺縁位・隅の食卓型」で8人の13.8%である。それ以外は、「人じるし・人マーク」が5人の8.6%、「コミュニケーション充実型」が2人の3.4%、「枠からはみ出す人物型」が1人の1.7%であった。本調査では、一人の絵を描いた子どもたちの絵で「人なし・食物のみ」と「手なし人物型」に分類され

る絵はなかった。

本調査の一人の絵を描いた子どもたちの絵で、表現形式の3つの分類のなか、一番多かったのが「大きさ・筆圧安定型」の33人で56.9%であった。「その他」は18人で31.0%である。これも投げやりで乱雑な描き方が多かった。あとは「人物萎縮型」は6人で10.3%、「消し書き・弱い筆圧」は1人で1.7%である。

2003年埼玉県と本調査の結果を比較すると、本調査は圧倒的に「一人強調」が多い。2003年埼玉県の数値が70人中6人で8.6%であるのに対して、本調査では58人中42人に当たる72.4%が「一人強調」であった。反対に、「コミュニケーション充実型」になると、本調査では、2人で3.4%になっているのに対して、2003年埼玉県では18人の25.7%になっている。

興味深いのが、「枠からはみ出す人物型」を描いている人数である。2003年埼玉県の調査では全体の636人の内6人、本調査では全体の410人の内2人しかいなかったが、2003年埼玉県の調査での6人は、全員1人で食べる絵を描いている。また、本調査でも2人の内1人が一人で食べている絵である。「枠からはみ出す人物型」というのは怒りや攻撃的な気分があるときに描かれる絵である。子どもたちは一人で食べているときに、攻撃的な気分になっていたのであろうか。

前述したように、「食卓の絵」を描いた子どもたち全体と、「一人で食べている絵」を描いた子どものアンケートの結果に大きな差異はみられなかった。これは意外な結果であるといえる。一人で食べることが快適であると感じる子どもたちが増えているという情報は、さまざまなメディアを通して得ていたが、本調査によって、子どもたちに都市型の個人主義的なライフスタイルが浸透していることが明らかになった。

表5 一人の絵を描いた子どもに関する比較分析

	(2003年埼玉県)		>	(2004年東京・大阪)		(2003年埼玉県)		(2004年東京・大阪)	
	人	割合(%)		人	割合(%)	人	割合(%)	人	割合(%)
①コミュニケーション充実型	18	25.7%	>	2	3.4%	243	38.2%	145	35.4%
②人なし・食物のみ	0	0.0%		0	0.0%	96	15.1%	16	3.9%
③人じるし・人マーク	10	14.3%	>	5	8.6%	185	29.1%	142	34.6%
④手なし人物型	2	2.9%	>	0	0.0%	26	4.1%	18	4.4%
⑤枠からはみ出す人物型	6	8.6%	>	1	1.7%	6	0.9%	2	0.5%
⑥辺縁位・隅の食卓型	26	37.1%	>	8	13.8%	59	9.3%	37	9.0%
⑦人物の包囲・包み込み型	2	2.9%	>	0	0.0%	11	1.7%	2	0.5%
⑧一人強調	6	8.6%	<<	42	72.4%	10	1.6%	45	11.0%
⑨その他	0	0.0%		0	0.0%	0	0.0%	3	0.7%
合計	70人	100.0%		58人	100.0%	636人	100.0%	410人	100.0%
①大きさ・筆圧安定型	33	47.1%	<	33	56.9%	377	59.3%	213	52.0%
②人物萎縮型	22	31.4%	>	6	10.3%	118	18.6%	26	6.3%
③消し書き・弱い筆圧	11	15.7%	>	1	1.7%	86	13.5%	35	8.5%
④その他	4	5.7%	<<	18	31.0%	55	8.6%	136	33.2%
合計	70人	100.0%		58人	100.0%	636人	100.0%	410人	100.0%

### 5. アンケート調査結果にみる、「食卓の絵」を描いた子どもと「コ食の絵」を描いた子どもの差異

「食卓」の絵を描いた子ども全体と、「食卓」の絵を描いた子どもの内一人で食べる絵を描いた子ども、すなわち「コ食」の絵を描いた子どもについては、別途実施したアンケートの調査結果<sup>14)</sup>を通して比較した。その結果は、表6のように示される。

結論をから述べると、「食卓」の絵を描いた子ども全体と「コ食」の絵を描いた子どもとを比較しても、調査結果には明確な差異はみられなかった。

ところで、コ食の絵を描いたものは58枚あり、全体の14.1%であった。コ食の絵を描いた子どもたちは、毎日一人で食べているのであろうか。

表6は「食卓」の絵を描いた子どもたちのなかから、

コ食の絵を描いた子どものアンケートの回答のみを抽出したものである。ただ、コ食の絵はわずか58枚であったので、母数自体が少ない。それゆえ、割合(%)のみならず、実数も示しておきたい。

表6によると、一人で食べる絵を描いた子どもでも、実際は家族と一緒に食べている子どもが多いようである。「朝食はだれと一しょに食べましたか」という質問に対して、コ食の絵を描いた子ども58人の内16人の27.6%は「家族全員と」、「おともいたが全員ではない」が19人で32.8%、「兄弟と」は11人で19.0%、「ひとりで」は11人で19.0%であった。「夕食はだれと一しょに食べましたか」という質問に対して、「家族全員と」は25人で43.1%、「おともいたが全員ではない」は5人で8.6%、「兄弟と」は6人で10.3%、「ひとりで」は21人で36.2%であった。

一見、家族と一緒に食べる方が多いのではないかと思

表6 食・生活状況に関する、「食卓」の絵を描いた子どもと「コ食」を描いた子どもとの比較

夕食は誰と一緒に食べましたか?		「食卓」の絵を描いた子ども(415人)		「コ食」の絵を描いた子ども(58名)	
	人	%	人	%	
①家族全員と	206	49.6	>	25	43.1
②大人もいたが全員でない	22	5.3		5	8.6
③兄弟と	27	6.5		6	10.3
④一人で	153	36.9		21	36.2
無回答・判別不可能など	7	1.7		1	1.7
合計	415	100.0		58	100.0

夕食を家族全員そろって食べるのは、1週間うち何回くらいですか?		「食卓」の絵を描いた子ども(415人)		「コ食」の絵を描いた子ども(58名)	
	人	%	人	%	
①7回(毎日)	79	19.0		13	22.4
②5~6回	77	18.6		9	15.5
③3~4回	85	20.5		12	20.7
④2~1回	139	33.5		20	34.5
⑤0回	34	8.2		4	6.9
無回答・判別不可能など	1	0.2		0	0.0
合計	415	100.0		58	100.0

夕食を誰と一緒に食べるときが一番楽しいですか?		「食卓」の絵を描いた子ども(415人)		「コ食」の絵を描いた子ども(58名)	
	人	%	人	%	
①家族全員	310	74.7		42	72.4
②お父さん	20	4.8		3	5.2
③お母さん	5	1.2		1	1.7
④きょうだい	22	5.3		2	3.4
⑤一人で	30	7.2		5	8.6
⑥その他	21	5.1		5	8.6
無回答・判別不可能など	7	1.7		0	0.0
合計	415	100.0		58	100.0

食事の時間のイメージは、楽しい		「食卓」の絵を描いた子ども(415人)		「コ食」の絵を描いた子ども(58名)	
	人	%	人	%	
①大変よくあてはまる	199	48.0		31	53.4
②まあまああてはまる	134	32.3		16	27.6
③あまりあてはまらない	61	14.7		6	10.3
④まったくあてはまらない	18	4.3		4	6.9
無回答・判別不可能など	3	0.7		1	1.7
合計	415	100.0		58	100.0

食事の時間のイメージは、明るい		「食卓」の絵を描いた子ども(415人)		「コ食」の絵を描いた子ども(58名)	
	人	%	人	%	
①大変よくあてはまる	211	50.8		33	56.9
②まあまああてはまる	127	30.6		15	25.9
③あまりあてはまらない	54	13.0		6	10.3
④まったくあてはまらない	19	4.6		3	5.2
無回答・判別不可能など	4	1.0		1	1.7
合計	415	100.0		58	100.0

食事の時間のイメージは、重い		「食卓」の絵を描いた子ども(415人)		「コ食」の絵を描いた子ども(58名)	
	人	%	人	%	
①大変よくあてはまる	14	3.4		5	8.6
②まあまああてはまる	25	6.0		1	1.7
③あまりあてはまらない	129	31.1		18	31.0
④まったくあてはまらない	244	58.8		33	56.9
無回答・判別不可能など	3	0.7		1	1.7
合計	415	100.0		58	100.0

家族の人たちと一緒に過ごすことがありますか?		「食卓」の絵を描いた子ども(415人)		「コ食」の絵を描いた子ども(58名)	
	人	%	人	%	
①多い	287	69.2	>	38	65.5
②ときどきある	112	27.0		17	29.3
③ほとんどない	15	3.6	<	3	5.2
無回答・判別不可能など	1	0.2		0	0.0
合計	415	100.0		58	100.0

自分のことをわかってくれる家族の人がいる		「食卓」の絵を描いた子ども(415人)		「コ食」の絵を描いた子ども(58名)	
	人	%	人	%	
①大変よくあてはまる	240	57.8		36	62.1
②まあまああてはまる	101	24.3	>	8	13.8
③あまりあてはまらない	46	11.1		6	10.3
④まったくあてはまらない	25	6.0		7	12.1
無回答・判別不可能など	3	0.7		1	1.7
合計	415	100.0		58	100.0

自分に満足している	「食卓」の絵を描いた子ども(415人)		「コ食」の絵を描いた子ども(58名)	
	人	%	人	%
①大変よくあてはまる	84	20.2	13	22.4
②まあまああてはまる	157	37.9	22	37.9
③あまりあてはまらない	113	27.2	10	17.2
④まったくあてはまらない	58	14.0	13	22.4
無回答・判別不可能など	3	0.7	0	0.0
合計	415	100.0	58	100.0

自分のことが好きだ	「食卓」の絵を描いた子ども(415人)		「コ食」の絵を描いた子ども(58名)	
	人	%	人	%
①大変よくあてはまる	115	27.7	22	37.9
②まあまああてはまる	123	29.6	12	20.7
③あまりあてはまらない	117	28.2	14	24.1
④まったくあてはまらない	59	14.2	10	17.2
無回答・判別不可能など	1	0.2	0	0.0
合計	415	100.0	58	100.0

家族のことが好きだ	「食卓」の絵を描いた子ども(415人)		「コ食」の絵を描いた子ども(58名)	
	人	%	人	%
①大変よくあてはまる	224	54.0	31	53.4
②まあまああてはまる	126	30.4	14	24.1
③あまりあてはまらない	48	11.6	10	17.2
④まったくあてはまらない	15	3.6	3	5.2
無回答・判別不可能など	2	0.5	0	0.0
合計	415	100.0	58	100.0

われるが、「夕食を家族全員そろって食べるのは1週間の内、何回ぐらいですか」という質問に「7回」は13人の22.4%、「5～6回」は9人で15.5%、「3～4回」は12人で20.7%、「1～2回」は20人で34.5%、「0回」は4人で6.9%であったことから、家族全員で毎日食べるという家庭そのものが少ないのではないかと推測される。

「朝食は楽しかったですか。つまらなかったですか」という問いに対して、一番多い回答は「食卓」の絵を描いた子どもも、「コ食」の絵を描いた子どもも「どちらともいえない」で各々、61.9%と63.8%であった。つまり、6割の子どもが「どちらともいえない」を選んでいるということである。

「朝食は誰と一緒に食べましたか」という質問に対して、「コ食」の絵を描いた子どもで、「一人で」と回答したのは19.0%で、「家族全員」と答えた27.6%の方が多い。「食卓」の絵を描いた子どもも「家族全員」と答えたのは21.4%である。「コ食」の絵を描いた子どもも「食卓」の絵を描いた子どもも「大人もいたが全員でない」という回答が一番多かった。このことから、朝食は家族全員で食べるよりも、食べない人がいることや、家から出る時間の違いによって、バラバラで食べるということが多いということが推測できる。

家族全員で朝食を食べることが少ないという結果に対して、「朝食を誰と一緒に食べるときが一番楽しいですか」という質問に対して、「コ食」の絵を描いた子どもの59.8%が各々、「食卓」の絵を描いた子どもの51.7%が「家族全員」と答えていることから、実際は、家族全員で食べたいと思っている子どもが多いということがわかる。一方で「一人で」と答えた子どもが11.1%と12.1%

で、1割ずついるということも事実である。

「夕食は誰と一緒に食べましたか」という質問になると、「家族全員」と答える子どもが49.6%、43.1%と増えると同時に、「一人で」という回答も各々、36.9%、36.2%に増える。ここでも「コ食」の絵を描いた子どもと、「食卓」の絵を描いた子どもの違いはあまりみられない。「夕食を誰と一緒に食べるときが一番楽しいですか」という質問でも、「家族全員」と答えたのは各々、74.7%、72.4%であり、実際は、家族全員で食べたいと思っている子どもが多いということがわかる。

食事の時間のイメージについての質問では、「楽しい、明るい、温かい、やわらかい」というポジティブなイメージでも、「バラバラだ、重い」というネガティブなイメージでも、「コ食」の絵を描いた子どもと、「食卓」の絵を描いた子どもの違いはあまりみられなかった。

「自分のことをわかってくれる家族の人がいる」という質問に対しては、「大変よく当てはまる」、「まあまあ当てはまる」と答えたのは「食卓の絵」を描いた子どもは82.1%で、「コ食の絵」を描いた子どもは75.9%であった。このことから「食卓」の絵を描いた子どもの方が、「コ食」の絵を描いた子どもより「自分のことをわかってくれる家族の人がいる」と感じている子が多いことがわかる。

注目すべきだと感じたのは、「自分のことが好きだ」という質問と「家族のことが好きだ」という質問である。「自分のことが好きだ」という質問については、「大変よく当てはまる」、「まあまあ当てはまる」と答えた割合が、「コ食の絵」を描いた子どもと、「食卓の絵」を描いた子どもとのあいだで顕著な差異はみられなかった。

ところが、「家族のことが好きだ」という質問になると、「大変よく当てはまる」、「まあまあ当てはまる」と答えた割合が、「食卓の絵」を描いた子どもが84.4%である。それに対して、「コ食の絵」を描いた子どもは77.5%であった。

以上のことから、「コ食の絵」を描いた子どもと「食卓の絵」を描いた子どもには、自己肯定感についてはあまり差異はないが、「食卓の絵」を描いた子どもの方が「コ食の絵」を描いた子どもよりも、家族を好きと感じている割合が高いということがわかる。「コ食の絵」を描いていても、実際は、家族と食べている子どもが多かったことから、「コ食の絵」を描いた子どもは、家族と一緒にご飯を食べることができずに寂しかった「食卓」のことを思い出したり、家族で食べていてもなんとなく寂しかった時のことを思い出したりして、「コ食の絵」を描いたのかも知れない。

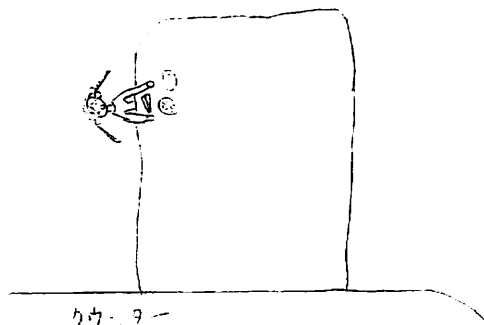
### 6. 一人で食べる「子どもの絵」の事例研究

このように、本調査結果を参照する限り、「食卓の絵」を描いた子どもたち全体と、「一人で食べている絵」を描いた子どもに大きな差異はみられなかった。従ってここでは、子どもが描いた「食卓の絵」の内、一人で食べる絵の事例を示したい(図3参照)。というのも、絵をみることにより、数値による調査データではみえてこな

い、一人で食べている絵の雰囲気伝わってくるからである。

繰り返すと、一人で食べることを「コ食」と呼び、さらにその状況により、「孤食」、「個食」、「子食」と分類した。再び簡略化すると、「孤食」は、家族が家のなかにいるのか、一緒に食べているのかはわからないが、一人で食べている絵である。「個食」は、親が同じ室内にいながら、食べているのは子どもだけという絵である。「子食」は、

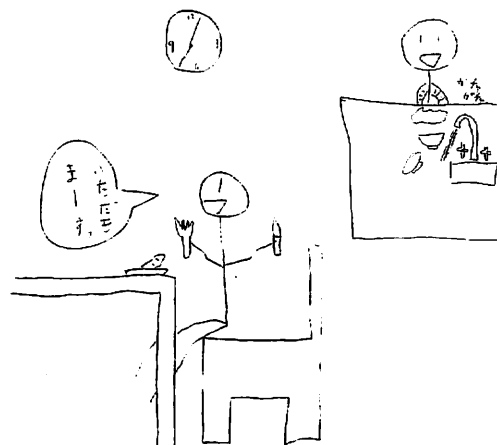
ケース1



ケース2



ケース3



ケース4

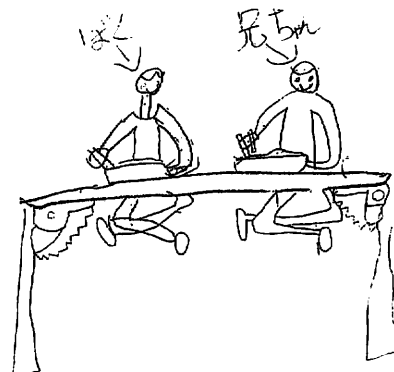


図3 コ食の子どもの事例

親は描かれずに、子どもたちのみ、つまり兄弟姉妹のみが描かれている絵である。

ケース1は、「孤食」の事例である。女子とみられる子どもが、広いテーブルに一人で座っている。絵の空白の部分に、実際は家族がいて、ともに食事をしていたのかも知れないし、話もしていたのかも知れないが、描かれているのは一人のみである。子どもの表情をみると、口をポカーンと開けていて、おいしく噛んで食べているという様子ではないように見える。テーブルや部屋の間取りに対して、子どもが小さく描かれているせいか、寂しげな表情にも映る。

一方、ケース2を見ると、この絵も一人で食べている絵ではあるが、表情はいきいきとして実に楽しそうである。ケース1と比べて、枠に対する子どもの顔の比率が大きい。おかずもたくさんテーブルに並べられており、お箸を口の側まで持ってきていて、おいしそうに食べている様子が伝わってくる。その上、マンガのように人物の後方には「おいしーい」という言葉まで書かれている。それは、楽しく食事をしているという雰囲気が伝わってくる絵である。この絵を描いた子どもも、一人で食べる方が気楽で快適であると感じているのであろうか。

ケース3は、「個食」の事例である。子どもが食事をしているその一方で、親とみられる人物が食器を洗っている。他に兄弟や家族は描かれておらず、子どもが一人で食事をしている。ただ、子どもも親も笑っている。食事を前にした子どもは、「いただきまーす。」と声を出して、手にはフォークとナイフを持っている。食事がおいしそう、食べようという意欲が伝わってくる。

ケース4は、「子食」の事例である。人物が2人描かれていて、それぞれに矢印で「ぼく」、「兄ちゃん」と書かれている。親と見られる人物は描かれておらず、兄弟で食べる様子のみが描かれている。表情は、笑顔である。手に持った箸は、皿にも向かっていて、ここから食欲が感じられる。ただ表現内容が、「辺縁位、隅の食卓型」になっている。「辺縁位、隅の食卓型」の絵は、誰かに寄りかかりたい、寂しいというときに描く絵であるがゆえに、そうした気持ちであったのかも知れない。

## 結語

本論文は、足立己幸の食生態学調査に基づく子どもの食生活研究と、室田洋子の動的家族画法に基づく子どもの「食卓の絵」の分析を手がかりとしながら、現在の子どもたちの食生活、食事空間、食事形態等を総合的に調査し、分析・解釈してきた。

本論文を通して明らかになったことは、次のように要約できる。

- ①従来、食卓は家族の団欒であると捉えられ、家族の共食が家庭の求心力を示すメルクマールだと考えられてきたが、近代家族の歩みから巨視的にみると、子どもや女性にとって食卓は楽しいものとは限らないのである。
- ②上記①の前提のもと、一般的に食卓は、両親をはじめ家族の者が子どもをしつけたり教育したりする場であるとともに、食事の家族団欒を通して子どもがコミュニケーション能力を身につけたり心理的安定を得たりする機会になると考えられてきたが、それは超歴史的で偏った捉え方である。つまり、そうした捉え方は、心理主義化された社会を色濃く反映させた、食卓の心理主義の立場に過ぎない。
- ③上記②との関係で、現代において食卓の心理主義を提唱するのは、主に「こころの専門家」である。「こころの専門家」が子どもの描く「食卓の絵」を分析・解釈すること自体は、重要な研究であるにもかかわらず、その研究成果を充分活かすためには、彼らが研究の前提とする心理主義や教育主義の呪縛から自由でなければならない。
- ④食卓の心理主義という前提を取り払った上で食生態学調査を通して食卓の果たしている重要な機能を探究した結果、次のことが明らかになった。子どもをはじめ、家族が食卓を囲んで共食することが不可欠なのは、複食に象徴されるように、子どもにとって二世代あるいは三世代にわたる多彩で豊かな献立をとることができるからである。
- ⑤上記④の結論からさらに、次のことが帰結してくる。子どもたちが、親をはじめ家族の人たちと一緒に食事をとらず、コ食（孤食、個食、子食）をとることが良くない本当の理由とは、コ食が家族との共食と比べて質量ともに献立がきわめて貧弱になることにある。正確にいうと、コ食では育ち盛りの子どものに不可欠な献立、すなわち3つの器（主食、主菜、副菜）のバランスが悪く、コ食の子どもは十分な栄養を摂取できない。
- ⑥従来、子どもの描く「食卓の絵」の分析に基づいて子どもの孤食の悲惨な状況が指摘されてきたが、そのこと以上に深刻なのは、上記⑤で述べた孤食（広く、コ食）の子どもたちの栄養状態である。従って、子どものコ食（特に、孤食）とは、子どものこころの問題というよりも、健康にかかわるからだの問題であると考えられる。

- ⑦以上のことから、食卓に家族関係形成や人間形成およびこころの成長の機能を求める「食卓の心理主義」に対して食生態学調査およびその結果から異論を唱えた上で、動的家族画法等に基づいて子どもが描く「食卓の絵」を分析することによって現在の子どもたちの食生活、食事空間、食事形態等を総合的に調査し、分析することが必要である。
- ⑧上記⑦の研究方法に基づいて調査研究を行った結果、次の結論を得た。現在の子どもたちは、食卓を通して家族と会話をしたり笑顔を交わしたりするといった経験が少なくなりつつあるため、絵のなかの家族の表情や存在感が乏しく、家族の人たちは単なる記号(円、四角、線による人物の印など)として表されてしまう。
- ⑨上記⑧の研究結果に基づくと、今後の家庭の課題は次のようになる。家庭(親子)の心理主義化および心理主義的な食卓論や家族論に基づく、家庭への過剰な期待を回避した上で、子どもが描く「食卓の絵」を見る限り、食事空間は、前述した健康やからだの問題に加えて、家族の人たちとのごく普通のコミュニケーションができる場に再生していくことが必要である。
- ⑩上記⑨の補足として、家族とのコミュニケーションを行う機会は、食卓、すなわち食事の家族団欒に限定される必要はないが、それでも食卓もそうした機会の1つであると認識していくことが求められる。心理主義的な捉え方をはじめ、食事の団欒の現実と幻想を見極めながら、子どもにとって無理のない食事空間を築いていくことが重要である。

### 注釈

- 1) 山路健『食卓のパロディー』農文協出版会、1988年、pp.156-158
- 2) 『企画開発に使える統計データ』別冊宝島、2003年、pp. 6 - 7
- 3) 石毛直道『食事の文明論』中央公論社、1982年 p.33
- 4) 同上書、p.34
- 5) 足立己幸+NHK「おはよう広場」班『なぜひとりで食べるの』NHK出版協会、1983年参照
- 6) 足立己幸+NHK「子どもたちの食卓」プロジェクト『知っていますか 子どもたちの食卓——食生活からからだど心がみえる——』NHK出版協会、2000年参照
- 7) 室田洋子『心を育てる食卓——食卓の家族論——』芽ばえ社、1995年
- 8) 同上
- 9) 同上書、p.22
- 10) 同上書、p.20
- 11) 日比裕泰『動的家族描画法——家族画による人格理解——』ナカニシヤ出版、1986年
- 12) 室田洋子編著『こっち向いてよ——食卓の絵が伝える子供の心——』幸書房、2004年、p.90-92
- 13) 同上書、p.94
- 14) 中井孝章(研究代表)『大都市圏における子どもの生活問題と生活改善のあり方に関する総合的研究(平成15~17年度)』、大阪市立大学都市問題研究、pp. 1 - 656および中井孝章編著『大都市圏の子どもたち』日本教育研究センター、2006年、pp.59-141

## 「食卓の絵」を通してみる現代の子どもの家族関係 ——心理主義化された家族関係を越えて——

中井 孝章

要旨：本論文は、足立己幸の食生態学調査に基づく子どもの食生活研究と、室田洋子の動的家族画法に基づく子どもの「食卓の絵」の分析を手がかりとしながら、現在の子どもたちの食生活、食事空間、食事形態等を総合的に調査し、分析したものである。

本論文の独自性は、前述の先行研究に依拠しながらも、食卓の人間形成機能を強調せず、近代家族の歩みのもとに相対化しているところにある。つまり、一般的に食卓は、両親をはじめ家族の者が子どもをしつれたり教育したりする場であるとともに、食事の家族団欒を通して子どもがコミュニケーション能力を身につけたり心理的安定を得たりする機会になると考えられている。それは、いわゆる食卓の心理主義の立場に過ぎない。著者は、こうした

食卓の心理主義を批判するとともに、食卓の重要な機能を別のことに求めた。逆説的な言い方をすると、親をはじめ家族の人たちと一緒に食事をとらず、子どもがコ食（孤食、個食、子食）を行うことが良くない理由とは、後者が前者と比べてはるかに献立が貧弱になることにある。正確にいうと、コ食では育ち盛りの子どもに不可欠な3つの器（主食、主菜、副菜）のバランスが悪く、コ食の子どもは十分な栄養を摂取できないのである。従って、子どもが家族の人たちと共食しないことは、子どものこころの問題というよりも、健康にかかわるからだの問題なのである。

以上、本論文は、食卓に家族関係形成や人間形成およびこころの成長の機能を求める「食卓の心理主義」に対して食生態学調査およびその結果から異論を唱えた上で、動的家族画法に基づいて子どもが描く「食卓の絵」を分析することによって現在の子どもの家族関係の様子を調べた。その結果、現在の子どもたちは、食卓を通して家族と会話をしたり笑顔を交わしたりするといった経験が少なくなりつつあるため、絵のなかの家族の表情や存在感が乏しく、家族の人たちは単なる記号（円、四角、線による人物の印など）として表されることになる。

家庭（親子）の心理主義化および心理主義的な食卓論や家族論は、避けなければならないが、子どもが描く「食卓の絵」を見る限り、食事空間は、子どもにとって前述したからだの問題に加えて、家族の人たちとのごく普通のコミュニケーションができる場に再生していくことが必要である。家族とのコミュニケーションを行う機会は、食卓、すなわち食事の家族団欒に限定される必要はないが、それでも食卓もそうした機会の1つであると認識していくことが求められる。心理主義的な捉え方をはじめ、食事の団欒の現実と幻想を見極めながら、子どもにとって無理のない食事空間を築いていくことが重要である。